中央大学経済研究所年報　第43号(2012) pp.597-648

日本統治下台湾博覧会とその宣伝活動

林　惠　玉

台湾総督府は1935年，台湾統治40年来の成果を示すべく，「始政40周年記念博覧会」を挙行した。本稿は，①台湾博覧会の経過，②各展覧会の出品内容，③台湾島内外の動員，④台湾社会に及ぼした影響を検討する。①では，開会前の準備と手配，会場の選定と開会式について述べる。②では，各館の施設と出品内容を観察する。③では，勧誘状，絵葉書，リーフレット，パンフレット，チラシ，小公学校児憲章作文など文書による宣伝，会報による宣伝，新聞・雑誌による宣伝，ポスター，看板，電飾および幻灯連続三角旗・気球・雪洞などによる掲示宣伝，ラジオ放送局の開設，放送の利用，全国出中継，台湾島内放送，実況中継，台湾音楽・娯楽番組などの放送による宣伝映画，映画による宣伝，航空宣伝，その他，スタンプ・小型マッチ・浴衣などによる宣伝を観察する。④では，各種特催日，実演と余興などを検討し，以上の活動が台湾社会に与えた影響を考察した。

はじめに

日本は1895年に台湾統治を開始して以来，台湾で計画的に各種の改造と基礎建設を推進し，７名の武官総督（樺山資紀，桂太郎，乃木希典，児玉源太郎，佐久間左馬太，安東貞美，明石元二郎）と８名の文官総督（田健治郎，内田嘉吉，伊澤多喜男，上山満之進，川村竹治，石塚英藏，太田政弘，南弘）の経営によって「掃匪理蕃」，「衛生施設の改善，交通通信機関の整備，灌漑水路の開鑿，港湾河川の修築等」[1)]を完成し，諸般の施設整備，文化の向上，殖産興業の振興も成果をあげ，1932年，第16代で最後の文官総督となった中川健藏の就任後，総督官房に外事課を設け，南支南洋事務を管掌し，台湾を日本の南進政策の重要基地としていった。

1934年には，日月潭水力発電廠が竣工した。これを機に中川総督は，各界の人々の建議を受け，内外に対して日本による台湾統治以来の産業・教育・貿易・土木・交通・理蕃等の建

1）鹿又光雄編輯『始政四十周年記念台湾博覧会誌』始政四十周年記念台湾博覧会，1939年１月23日，２ページ。

設の成果を展示する必要があると考え，1935年の台湾統治40周年を期して「始政四十周年記念台湾博覧会」（以下，台湾博覧会と称する）の挙行を決定した。

本論文は，台湾博覧会の開催経過，各展覧館の出品内容，台湾島内外各界の動員，台湾史上最大の博覧会の挙行が台湾社会に及ぼした影響などについて記述する。

1．台湾博覧会開催の経過

台湾総督府は，1916年に台北共進会を開催したのち，10年ごとに始政記念の名義で記念活動を行なってきたが，1935年の博覧会の目的は台湾統治40年来のすべての成果を総結することだった。そこで，中川健藏総督がみずから台湾博覧会総裁を担当し，平塚廣義総務長官が同会会長を担当したほか，広く台湾全島の官民有力者を招き，「始政四十周年記念台湾博覧会協賛会」（以下，台湾博覧会協賛会と称す）を設立して台湾博覧会の各種事務に協力させることとした。同会会長は，台湾電力株式会社社長松木幹一郎，副会長は台湾日日新報社社長河村徹，台北商工会会長後宮信太郎とし，中川台湾総督，寺内台湾軍司令官，平塚台湾総督府総務長官等３名が同会名誉会員となり，同会顧問には台湾総督府各部局長，台湾軍参謀長並に海軍武官，高等法院長並に同検察官長，台北帝国大学総長，台湾銀行頭取，その他官民有力者ら30名を当て，理事19名，評議員1,064名，委員550余名に一般会員を加え，全部で１万1,000余名を網羅した。

1-1　開会前の準備と手配

協賛会の主な仕事は，「中外各方面への宣伝，諸設備の営繕，来観客への勧誘と接待，演芸等余興各種催物，売店の開設その他博覧会の盛況を援くる百般事務の準備」などであった。接待部は「親切第一，愛嬌そへて」の標語を掲げて，来賓ならびに観覧客への快いサービスを信条とし，各種の施設分掌のもとに250名の係員がその任務に当たった。

まずは交通問題で，総督府および交通局逓信部においては日本航空輸送株式会社と協議し，「本会開催期たる十月初旬より，取敢えず週一往復の定期郵便飛行実施のことに決定，“福岡台北間”（1935年10月８日，内地台湾第一便）（1935年10月12日，台湾内地第一便）［の］就航［が］開始」[2]された。

また，台湾総督府交通局逓信部は関係機関の協力のもとに近海郵船株式会社，大阪商船株式会社，大連汽船株式会社が内国航路を担当し（1935年10月１日～11月20日），外国航路の「船客運賃割引」を実施した（1935年９月20日～11月10日）。台湾鉄道局も，個人旅客は島内在住者（1935年10月５日～11月28日），島外よりの来台者（1935年10月５日～12月10日）に，

2）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』594ページ。

団体旅客並の鉄道運賃割引を提供した。

1-2　会場の選定と開会式

台湾博覧会は，台湾島内官民のコンセンサスが形成され，日本内地の各府県，樺太，北海道，朝鮮，満洲，中国地域，南支および南洋などからの協力があり，代表的な産品の展示参加が得られた。参加の範囲が相当広かったので，展覧者の展示内容に対応するため，1935年１月９日，台湾博覧会準備委員会は台北市公会堂付近と以南３線道路を第１会場（敷地，１万3,000坪），台北市公園を第２会場（敷地，２万4,000坪）とし，台北市郊外の遊覧地草山（現在の陽明山）温泉および国立公園候補地から大屯山彙一帯までの草山分館を第３会場（敷地，5,000坪）とした。第４会場，台北市大稲埕は，台湾総督府評議員郭廷俊が1934年に昭和天皇によって日本貴族院議員に敕選された台湾人辜顕栄および当地の紳士・商人ら19名と共に台湾総督府総務長官平塚広義に陳情し，分場（敷地，4,000坪）を設けることとした場所である。その陳情書の内容は次の通りである。

「台湾統治四十年間ノ結晶タル政治，経済，文化，産業ノ驚異的進歩発達ヲ記念シ且之ヲ中外ニ宣揚スベク始政四十周年記念台湾博覧会ヲ開催ナサルル儀ハ台湾統治ノ成功ニ対スル島民及中外ノ認識ト感激ヲ喚起シ併セテ前途ヲ祝福スルモノニシテ全ク国家的意義アルモノト被存五百万島民ノ齊シク歓喜雀躍スル處ニ御座候
就テハ本島経済ノ中心ニシテ本島人ノ最モ多ク密集セル北区ニ分場ノ設置ヲ講ズルハ本島人ノ認識ト感激ヲ一層強クシ延テハ国家観念ヲ培養スル本トモナリテ大博覧会ノ意義ト效果ヲヨリ以上多大ニ齎ラス義ハ疑ナキ處ト被存候間何卒特別ノ御詮議ヲ以テ北区ニ分場設置方御取計相願度左計条件ヲ遵守スベク此段陳情候也
一　当方ニ於テ分場敷地ノ借入，既設建物ノ取拂立退及整地砂利敷等一切ノ準備ヲ完了ノ上敷地ヲ博覧会ニ提供致スベキコト
二　前項ノ外当方ニ於テ分場設置ニ伴フ経費増金一万一千円也ヲ負担致スベキコト」[3)]

台湾博覧会の会場敷地選定について，以下のように記述した。

「一，会場は分立したが，何れも市内繁華街の中心に位置し，相互に近接し，台北市全体を会場と為し得たこと
二，南方館を初，暹羅館，比律賓館及福建省特産物紹介所を大稲埕分場に設置し，南

3)　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』67-68ページ。

支，南洋の実情を詳細に紹介せると共に，本島人市街の生きた姿を紹介せること
三，草山分館は台北市より僅に三里以内の地に在り，本会観覧に併せ国立公園候補地紹介と，温泉地清遊の機会を与へたること」[4)]

以上の４会場を選定したあと，1935年６月５日午前８時より第２会場に充てられた台北市公園において台湾博覧会会場の地鎮祭が執行された。

台湾博覧会は，第１会場の台北市公会堂内で1935年10月10日午前８時頃，「式場大ポーチ上の台北音楽会吹奏楽団は，行進曲〈躍進台湾〉を奏してけふの佳き日を謳ふ」[5)]という鳴者入りで，９時30分，「紺碧の空高く轟く百雷三発」[6)]開会式が挙行された。開会式次第は「①開式（午前九時三十分〈煙火三発〉一同着席），②奏楽（君が代）一同起立，③開式挨拶，④事務総長経過報告，⑤総裁告辞，⑥大臣祝辞，⑦来賓祝辞，⑧協賛会長祝辞，⑨祝電披露，⑩閉式挨拶，⑪開宴（煙火三発），⑫会場観覧」[7)]などであった。

開会式に招待された来賓は7,874名で，枢密顧問官26名，内閣大臣13名，貴族院議員412名，衆議院議員488名，台湾関係陸海軍将校89名，法院68名，台北帝国大学および附属農林専門部85名など，およびその他島内来賓300名，台湾博覧会役職員2,377名（うち島外700）名，台湾博覧会協賛会役職員1,485名，出品人2,000名[8)]などであった。

開会式が終わると３発の煙火を合図に，来賓一同貴賓室および儀式大会場の周囲に設けられた模擬店において，芸妓および女給200余人のサービスによって高らかに盃を挙げ[9)]，正午賑やかに閉宴した。それより中川総裁，平塚会長は主なる来賓と共に，奥田出品部長の先導，中瀬事務総長の説明で，第１，第２会場および分場を巡覧し，その他の来賓も随意に各館を観覧した。祝賀宴閉宴後の午後１時から，各会場とも一般観覧者を入場させた。

２．各館の施設と出品内容

2-1　各館の施設

台湾博覧会主催者は，出品物収容施設として産業館（940坪，農業，水産，商工関係出品），林業館（120坪，林業関係出品），交通土木館（900坪，鉄道，逓信，土木，道路港湾関係出品），第１府県館，第２府県館（2,000坪〈２棟1,000坪宛〉，全国特産物出品），興業館

4）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』68-69ページ。
5）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』533ページ。
6）前掲５）に同じ。
7）前掲５）に同じ。
8）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』547ページ。
9）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』545ページ。

（290坪，中央研究所，電気，瓦斯，機械関係出品），第１文化施設館（300坪，教育，学芸，社会事業，保険，衛生関係出品），第２文化施設館（200坪，警察，司法，理蕃関係出品），国防館（330坪，陸軍，海軍関係出品），南方館（310坪，南支，南洋及南洋庁関係出品），シャム館（30坪），フィリピン館（30坪），福建省特産物紹介所（20坪），草山観光館（360坪，台湾・内地観光地紹介）などを直営した。

台湾博覧会主催者はまた，各府県官庁および地元商工団体を勧誘し，満洲館（270坪，関東庁，満鉄，満洲国関係出品），交通特設館（260坪，鉄道，逓信関係出品），福岡館（150坪），朝鮮館（170坪），日本製鉄館（90坪），三井館（110坪，三井物産株式会社出品），鉱山館（140坪，殖産局および鉱業会関係出品），糖業館（240坪，殖産局，糖業試験所および日本糖業聯合会出品），愛知名古屋館（220坪），北海道館（80坪），大阪館（200坪），船舶館（200坪，逓信部，各船会社出品），京都館（300坪），奈良館（40坪），電気館（130坪，台湾電力株式会社出品），東京館（200坪），専売館（900坪，専売局出品），馬産館（100坪，殖産局，軍部，畜産協会，競馬協会出品）などの特設館を設立した。

第１会場には「産業館，林業館，交通土木館，興業館，府県館，糖業館，鉱山館，交通特設館，朝鮮館，満洲館，福岡館，日本製鉄館，三井館，大陸橋」が設置され，第２会場には「第１文化施設館，第２文化施設館（附 蕃屋，望楼，穀舎，実演場），国防館，専売館，電気館，船舶館，東京館，北海道館，名古屋館，大阪館，京都館，迎賓館（洋館），子供の国（竜宮城，日の丸仰拝館，子供の家，蓬莱塔，遊戯場，飛行塔，ベビーカー），音楽堂，演芸館，映画館，台湾茶特設館」が設置され，大稲埕分場には「南方館，馬産館（附 馬場），演芸館，福建省特産物紹介所，暹羅（シャム）館，比律賓（フィリピン）館」が設置され，分館が設置された「草山観光館」は観光案内所となった。

2-2　直営館の出品内容

(1)　産業館は，台湾本島の生産物を宣伝し，その産業状態を内外に紹介するために設置され，農業では「台湾本島の特産物台湾茶及台湾青果，米の生産過程，米作の過去及現在，移出米検査関係，小麦栽培状況，甘藷栽培状況，苧麻，黄麻生産状況，四季の果実及蔬菜，落花生生産状況，棉栽培及処理状況，育蠶及種紙製造状況，豚コレラ予防状況，家畜家禽飼養状況，島内消費肥料，島内消費農薬，在来及改良農具，台湾の農業，花卉盆栽」[10]などが展示され，漁業では「鮪延繩漁業及旗魚突棒漁業状況，鵝鑾鼻附近の漁業状況，トロール漁業及機船底曳網漁業状況，鰮旋網漁業，惣田鰹定置漁業，鰹釣漁業，水産試験研究標本及見本，鱶剥製及其の製品，台湾附近漁場模型」[11]などが展示され，そのほか，「木工家具，竹細

10）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』278-284ページ。

工，織物及装身具工業，食料工業，土産品（通称蕃産屋と呼ばれている店の取扱品を意味するものであるが，其の中には「織物及装身具」の陳列品と重複するものもあり，此処では主として装身具に属せざる文具，置物，装飾用品を展示した），島外貿易（旧台湾の遺物たる戒克貿易の珍風景を紹介した）」[12]および「窯業，油脂薫香工業，製麺，蓮草紙製造」[13]および「移民の活動」[14]などの状況が紹介され，最後の出陳場面では「農工業の過去，現在，未来」[15]が展示された。

(2) 林業館の出陳は，「海岸の今昔，常夏台湾の森，主要林産物，雄大なる高山の景観，改良索道，試験資料，材鑑陳列，伐木集材作業，運材作業，嘉義貯木場，見本材鑑，造林作業」[16]などの12場面であった。展示の主な内容は，日本が台湾を統治して以後，台湾総督府の林業施設により，統治当初の「飛砂地を美田沃野」[17]に変え，荒廃した山を造林して鬱蒼たる森林とした，などの成果が展示された。

(3) 交通土木館の出陳は，鉄道セクションおよび逓信セクションからなり，鉄道セクションでは主として鉄道の現況を見せ，鉄道施設に対する常識，鉄道公徳の普及徹底，旅行奨励のための遊覧地紹介などに関するものが陳列配置された。逓信セクションは，郵便，電信，電話，保険，貯金，電気，海事などの７種類に分けて出品した。

このほか，台湾博覧会が開催される直前の1935年４月に新竹，台中で大地震が発生し，重大な人員死傷災害が起こったので，内務局土木課は「嘉南大圳組合烏山頭貯水池，河川堤防護岸」[18]の模型をジオラマ式に示した。また，「台北市水源地模型，上下水道施設模型，震災都市模型，震災復興都市模型，未来都市模型，国立公園施設模型」[19]などの６景を展示し，更に４カ所の壁面を利用し，各地都市計画に関する地図を掲げた。「未来都市模型」[20]展示場面の内部陳列装飾は，人口の都市集中が産業の興隆，交通の発達をもたらし，都市構築の科学も発達することを示した。「本島道路交通変遷図及道路交通模型」[21]展示場面の正壁面は，「本島道路交通変遷図」[22]で，道路建設・整備の経過と成果を示した。鉄道部出品の台湾全島

11) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』284-288ページ。
12) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』289-291ページ。
13) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』288-289ページ。
14) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』283ページ。
15) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』292ページ。
16) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』303-304ページ。
17) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』302ページ。
18) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』316ページ。
19) 前掲18）に同じ。
20) 前掲18）に同じ。
21) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』317ページ。
22) 前掲21）に同じ。

鳥瞰図展示場面は，台湾博覧会主催者出品用として，東部海上から俯瞰した景色を極彩色で描いたものだった。

⑷　府県館は，面積の関係上，第１府県館，第２府県館の２館に分けられた。第１府県館は，地理的または経済的に台湾に密接している「長崎県，佐賀県，熊本県，都城市，大阪市，大分県，鹿児島県，兵庫県および神戸市，沖縄県，高知県，愛媛県，徳島県，奈良市，香川県，静岡県」[23]の出品陳列に充て，第２府県館は比較的遠隔の「神奈川県，山口県，岡山県，広島県，三重県，滋賀県，富山県，和歌山県，山梨県，埼玉県，岐阜県，長野県，福井県，松江市，新潟県，石川県，秋田県，岩手県，若松氐，樺太庁」[24]の出品陳列に充てられた。府県館の出陳は大部分小間陳列で，台湾本島居住者には珍しいものだったため，観衆の好奇心をそそった。

⑸　興業館には，天然資源，試験研究，未来性を有する諸機械および発明品などかなり性質の異なるものが出陳された。そのうち，「繊維工業資源」[25]展示場面は，陳列された原料繊維の用途を示すため，各種の織物，編物などを陳列したが，フィリピン製の鳳梨布は非常に美しいので特に人目を引いた。台湾電力株式会社が出陳した「ロボット管絃楽団」[26]展示場面は，一定の時間が来れば裏の楽屋でスイッチを掛け，レコードを鳴らすと，ロボットがこれに応じて動き，ロボットがあたかも楽を奏しているように見せた。台北機械電気商協会員が「賀田組の松風濾過器，株式会社共益社（日本内地の九製作者の製品の代理出品である），明電舎製品出陳場，各社出陳，東京製綱株式会社の製品，ゐのくち式喞筒，各社出陳，日産自動車株式会社の製品，ステイムタービ模型，漁船模型，久保田鉄工所機械部の製品，イソライト工業株式会社の製品，各種見本」[27]などを出陳した。

発明品類展示場面は，台湾発明協会が陳列室を造り，特許および実用新案品「奉安金庫吸湿装置，枕，乾燥木瓜，セメント瓦，自動救助梯子，自動車フアツグ，沈床用金網，感光紙焼付機，発音練習器，紙袋糊附装置，硬質黒板，証書有効期間早見器，蚊取線香および灰落兼用蚊燻器，蓮草書翰紙，自動車泥除，バナナ美容精，バナナ食酢，椅子，黒板，厨炉，モタマ塗料及清浄剤，畳スタンド，洗磨剤，医療帯，帽子，下駄，ゴム草履，額縁，洗濯器，米尺附塗板，名数計数器，パイプ，犁其の他の農具，施肥器，温水缶」[28]などを綜合的に陳列した。

23）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』320-323ページ。
24）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』324-329ページ。
25）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』332ページ。
26）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』334ページ。
27）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』334-337ページ。
28）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』340ページ。

(6) 第１文化施設館の出陳は，学校教育関係と社会教育関係の２種だった。学校教育関係の展示は，「芝山巖学堂（初代学務部長伊澤修二氏の肖像を安置し，その傍に明治二十九年一月一日，匪賊の為に斃れた六氏の写真及〈学務官僚遭難之碑〉と刻んだ六氏の碑の写真並に，昭和五年に建立された芝山巖祠の写真を掲げた），初等教育の発展」[29]から「大学，高等，専門教育」[30]までの場面だった。そのうち，初等教育の発展は，日本の台湾統治以前から博覧会開催当時までの初等教育の発展過程を紹介した。師範学校の展開は，「四十年の歴史を有する師範教育の概観」[31]で，当時の師範学校の小模型を配列した。学校体育衛生の全貌の陳列室壁面に学校衛生，体育運動に関する写真，台湾全島におけるプール，海水浴場調査図ならびに小公学校児童の標準学校弁当の栄養量表などを展示した。また，ほかの陳列室壁面に台湾教育の外観と題し，日本統治開始から今日に至るまでの各種教育施設の発達を示す図表および統計が掲げられた。

社会教育関係の展示では，「神社崇敬，家庭に於る敬神，国民の典型的生活，台湾教化の現状，部落集会所を中心とする教化施設，国語普及施設，国語普及進展状況，図書館」[32]等の場面を展示した。そのうち，家庭における敬神は，２景に分かれ，右景には日本内地人家庭の神棚を示し，家族７人が礼拝している様を見せ，前方の立札に「皇祖神まつるは日々のつとめなり」[33]と書き，左景には台湾本島人住宅の正庁のほぼ理想的なものを示し，前方の立札には「日の本の国民われも神祭る」[34]と書いた。

「台湾教化の現状」[35]場面の内部装飾には，広芒たる大洋を描き，水平線上に遠く日本内地本土，朝鮮，琉球などを望む風景を見せ，日本内地本土の延長であることを連想させるものだった。「明治天皇の御製」[36]は，縦５尺，横４尺５寸の額面で，周囲には金色の飾縁を施し，額面上部には新高山と輝く雲海を描き，これを背景として御製「新高の山のふもとの民草も茂りまさるときくぞ嬉しき」[37]を額面一杯に謹書していた。

部落集会所を中心とする教化施設の場面は，「中央会議室，国語講習所，娯楽室兼図書室，結婚披露，国語講習，家長会議，主婦申合，青年集会，娯楽の夕，図書館施設，階和の夕」[38]などの11景を小ジオラマ式に展示したものである。国語普および施設は，「国語を解す

29) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』340-341ページ。
30) 前掲29）に同じ。
31) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』341-343ページ。
32) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』344ページ。
33) 前掲32）に同じ。
34) 前掲32）に同じ。
35) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』345ページ。
36) 前掲35）に同じ。
37) 前掲35）に同じ。

る者は幸福なり，国語を解すれば，国語を解せざれば」[39]などと題し，台湾島民が「国語を解すればかくの如く幸福になる，国語を解せざる者はかくの如き不幸に陥る」[40]とした。国語普及進展状況の場面は，「大正元年，同十年，昭和元年，同六年，同八年及同十年の国語解者数」[41]を示した。

そのほか，「部落教化の現況，全島社会事業分布図，内地方面事業概況，部落改善の現況，慈恵院事業，模範農村住宅模型」[42]等の展示場面があった。そのうち，社会事業関係出陳の模範農村住宅模型は，台湾博覧会開催の年に新竹，台中両州下を襲った震災により暴露した台湾本島在来の建築物の危険に鑑み，台湾新民報社が「衛生的にして耐震的なる模範農村住宅の設計を募集し，一等に当選した設計を採り，之を模型に表現して」[43]出品した。

⑺　第２文化施設館は，警務局警務課，同理蕃課，同衛生課，台北州衛生課，台北市衛生課，中央研究所衛生部，養生院，楽生院法院，刑務所，開導所などの官庁出品であった。その出品は，「昔の理蕃，高砂族の生活，今の理蕃」[44]等の展示だった。そのうち，高砂族の生活には「高砂族の生活を現すため，タイヤル，ツオウ，パイワン等の等身大の人形六体のほか，彼等の使用した衣類，装身具，家具，農具，ト占具，武具，彫刻品などを」[45]陳列した。星製薬の出品した「キナの栽培状況」[46]の内部装飾は，正壁面および側面を背景として原地の風景を描き，右方にはキナ樹林を，左方には「蕃屋」[47]を示し，前には２，３人が蹲居できる程度の窪地を造って高砂族を坐らせ，キナステッキ製作の実演を見せ，即売した。

警務局衛生課の出品「衛生ジオラマ」[48]は，台湾本島衛生行政の基調に脅威を与えたマラリア防止の成果を示した。台湾総督府前の広場上空には「〈衛生デー〉，〈子供の日〉」[49]などが宣伝広告され，衛生思想が広く普及し，衛生的理想都市の実現を訴えた。

⑻　国防館は，陸海軍の出品を陳列し，一半は陸軍の出品で，台湾軍司令部の計画に基づき博覧会主催者の費用で実施し，一半は海軍の出品で，博覧会主催者が出品計画を立て，海軍から兵器その他を借受けたものだった。計画の要旨は各種の艦艇や兵器などの機能や効果

38）　前掲35）に同じ。
39）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』346ページ。
40）　前掲39）に同じ。
41）　前掲39）に同じ。
42）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』346-348ページ。
43）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』348ページ。
44）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』348-349ページ。
45）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』349ページ。
46）　前掲45）に同じ。
47）　前掲45）に同じ。
48）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』352ページ。
49）　前掲48）に同じ。

を示し，「南門の鎖鑰」としての国防の重要性を示そうとした。

海軍セクションは，「軍艦陸奥主砲，各種兵器の陳列，軍艦金剛縦断大模型，南を守る我が海軍，潜水艦襲撃運動，いざ戦はん，落下傘，爆弾の威力，各種航空兵器，縦断潜水艦模型及縦断魚雷模型」[50]などの場面であった。

陸軍セクションは，「現代戦，新兵器，赤外線応用候敵機，新兵器，爆弾威力現示模型，毒ガス関係，満洲事変，日露戦役，日清戦役，爆撃状況，高等飛行，将来戦の糧食給養，熱地戦の給水と糧食，台湾国防義会会旗，熱地用被服，防寒用被服，航空被服と糧食，国防色被服」[51]などで，以上18場面の外，壁面を利用した未来戦と国家総動員の絵画は来るべき非常時の重大性を暗示したため，人目を引き，常に観覧者が集まり，雑踏を極めた。

⑼ 南方館は，「南支四港，香港，澳門，仏印，英領マライ，英印，蘭印，タワオ南洋庁ならびに南洋栽培協会」[52]などの出品だった。その出陳は，南支セクション，南洋栽培協会セクションに分けられた。南支セクションの出陳は「福州，厦門，汕頭，広東」[53]などの４展示室だった。南洋栽培協会セクションの出陳は，「南洋における邦人栽培事業の分布を示す現勢図，，原始林開墾状況，ゴム幼年樹林の状況，ゴム採集林の状況及工場作業状況，原料ゴムの種類陳列及積での状況，ゴム工業製品と需給状態，マニラ麻園及古々椰子園」[54]などの場面だった。

南方館の付属館である暹羅（シャム）館，比律賓（フィリピン）館および福建省特産物紹介所は，大稲埕の分場に建設された。シャム館は，壁画でシャムの風物を描き，陳列床に少々の見本と標本を陳列しただけだった。フィリピン館の主な陳列は，「穀類，樹脂，樹皮，椰子油，貝類，マニラ麻，カボツク，帽子，煙草，椰子の産品，珈琲，箆麻，デリス根，チーク材，マニラ麻，椰子の各種産品，挽材見本，事業写真」[55]などの場面だった。福建省特産物紹介所は，台湾式の建物で，主な陳列は「漆器，木画，貴重品，仏像，彫刻物，陶磁器，雑品」[56]などだった。陳列品は即売の売れ行きによって補足または陳列替えをしたが，かなり珍しく廉価でもあったので，観覧者や商人が集まって雑踏を極めた。

⑽ 草山観光館は国立公園の候補地である大屯山彙，「鞆之浦の朝景色，月夜の明石の浦，屋島の夕景，国立公園大雪山の晩秋，初夏の淡水，春の剣潭及大屯山系の大観，秋の塔山，

50） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』356-358ページ。
51） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』358-360ページ。
52） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』361ページ。
53） 前掲52）に同じ。
54） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』362-363ページ。
55） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』367-368ページ。
56） 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』368ページ。

月夜の日月潭，初冬の新高，臨海道路，タロコ峽，鵞鑾鼻灯台，未来の大屯，夏の夜の松島，雪の橋立，秋の厳島，晩秋の大阪，奈良公園の秋色，春に霞む京都，雪仙，阿蘇，霧島，秋の琵琶湖，春の日本ライン，夏の日本アルプス，日光の秋色，曉の富士，伊勢の神域，大東京の景観」[57]などの29景を展示した。草山観光館は，ほかの目的をもって設計された建物の一部を利用したものだったので，その外観も内容も台湾博覧会建築物ではなく，効果は充分に期待できるものではなかった。

2-3　特設館の出品内容

特設館のうち台湾島外関係のものは，満洲館，朝鮮館，北海道館，東京館，大阪館，京都館，愛知名古屋館，福岡館，日本製鉄館の９館で，台湾島内関係のものは糖業館，電気館，船舶館，三井館，専売館，鉱山館，交通特設館，馬産館の８館が設立され，合計17館だった。そのうち，第１会場に配置されたのは満洲館，交通特設館，福岡館，朝鮮館，日本製鉄館，三井館，鉱山館，糖業館の８館で，第２会場に配置されたのは愛知名古屋館，北海道館，大阪館，船舶館，京都館，電気館，東京館，専売館の８館であり，馬産館は大稲埕分場に配置された。

(1)　満洲館は満洲帝国，関東局および満鉄の３者共同で施設した。その出陳は「満洲現勢模型，日満経済提携，撫順炭鉱，牧畜及農業，油坊，満洲八風景，大連港模型，国都新京ジオラマ，鉄道，満洲井戸，物産陳列」[58]などの場面だった。

(2)　交通特設館は，台湾総督府交通局鉄道部と逓信部とが使用した。鉄道部の出陳は，「アプト式電気機関車模型，機関車の内部構造図，機関車の変遷，明治初年の鉄道参考品，御大礼記念乗車券，世界最初の鉄道，日本最初の鉄道，明治時代の台湾鉄道参考品，領台当時の鉄道，領台当時の参考写真，世界及日本の鉄道沿革，現在の台湾鉄道，参考図表及標本，鉄道の出来る迄，清水隧道附近の地形，鉄道知識の宝庫，ハンプ操車場模型，踏切事故防止，貨物及旅客，国際通運株式会社出品」[59]などの場面で，逓信部の出陳は「桃太郎誕生の場，桃太郎出陣の場，桃太郎鬼征伐の場，桃太郎凱旋の場，人造大亀，大型航空灯台，東京飛行場照明，グライダー，帝国飛行協会の太平洋制覇を目指す航空路計画図及朝日新聞航空写真，日満定期航空路図及其の他，落下傘其の他，神風三型発動機其の他」[60]などの場面だった。

(3)　福岡館は，出品の陳列および販売を主とし，同県の「海産物，軍手，タオル類，博多

57）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』368-371ページ。
58）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』372-373ページ。
59）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』374ページ。
60）前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』377-378ページ。

織，博多織ネクタイ，博多人形，博多絞，久留米傘，小倉の靴，花莚」[61]など出品点数は合計8,231点に達した。

⑷ 朝鮮館の出陳は，「鉄道局のジオラマ及写真，逓信局の出品，農林産陳列，水産，鉱産，朝鮮窒素肥料株式会社の全貌，工産，専売局出品」[62]などの場面だった。

⑸ 日本製鉄館の出陳は，「銑鋼一貫作業模型，熔鉱炉原料及副産物陳列室，骸炭原料及副産物陳列室，製鋼作業室，条鋼圧延作業室，鋼板圧延作業室，製品陳列室，活動写真室」[63]などの場面だった。

⑹ 三井館の出陳は，「三井物産の営業所の分布，自転車，芝浦製作所製品，台湾電化会社の製品，田中機械製作所の二重効用缶，綜合陳列場，総合陳列場，湯浅蓄電池及高濱タイプライター，日本碍子の製品，巴組鉄工所製ダイヤモンドトラス，洋瓦類及セメント，木材，台湾米及化学肥料，石炭窒素及硫安，満洲青島方面の特産物，船舶及石炭，藤倉電線の出品，織物とゴム靴，三井鉱山の各種薬品，蚊取線香・人参・食料品，三井の茶，喫茶店，冷蔵装置其の他」[64]などの場面だった。

⑺ 鉱山館の出陳は，「地質断面，炭山地層及採掘，坑内採炭状況，日本鉱業株式会社佐賀ノ関金銀鋼製錬所の全景，本山坑道，鉱石採掘作業，製錬場，製錬作業及坑内採炭状況，完全砂金採収機，錦水揮発油採収所全景及其の附属的出陳，松山電気鋳工所出品，出光商会出品，鉱産地図」[65]などの場面だった。

⑻ 糖業館の出陳は，「台湾糖業の躍進，糖業は台湾文化の母，砂糖が出来るまで，製糖会社製品，台湾糖業の光，砂糖売場，砂糖は子供の喜び老人の慰安，砂糖を使へ，国防と糖業，糖業試験所の試験成績，昔の製糖場」[66]などの場面だった。

⑼ 愛知名古屋館は，愛知県，名古屋市共同出品協会の経営で，その出陳は「自転車，豆粕粉砕機，鉄製品，楽器及玩具類，各種織物類，皮革製品，仏壇，唐木製品，時計，水産加工品」[67]などの小間出品物だった。出品者から直接購入し，商取引開始等の斡旋を行なった件数は，50数件に達した。

⑽ 北海道館の出陳は，「躍進大日本，世界に誇る北海の珍味，農産物移輸出状況，農産物，畜産，林産，躍進の北海道，昆布加工品及水産加工品，水産，海産物及其の加工品中の

---

61) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』378ページ。
62) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』379-380ページ。
63) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』381ページ。
64) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』382-383ページ。
65) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』384-387ページ。
66) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』388-392ページ。
67) 前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』393ページ。

小物，観光写真，貴重品，工産品，工芸品，雑貨即売場，毛皮即売場」[68]などの場面だった。

⑾　大阪館の出陳は，長谷川鉄工所，旭金庫工業株式会社，本多印刷機械製作所，住友化学工業株式会社，大日本除虫菊株式会社，内田洋行など40以上の会社・商店の小間出品だった。

⑿　船舶館は，大阪商船株式会社，近海郵船株式会社，大連汽船株式会社の共同建設だった。その出陳は，「京都加茂川夕凉，奈良公園の秋色，東洋に活躍せる大阪商船，東京桜田門，大阪城，安芸宮島，フィリッピンへ，シャムへ，アフリカへ，南米へ，月明の航海，にしき丸，世界に雄飛せる大阪商船」[69]などの場面だった。以上のほか商船セクションにおいては，「基神間の定期航路船の模型，秩父丸の縦断模型，富士丸及大和丸の模型」[70]などが展示された。

⒀　京都館の出陳は，京都市観光課，京都陶磁器工業組合，西陣織物同業組合，日本クロス工業株式会社など30以上の団体・会社・商店の小間出品だった。

⒁　電気館は，台湾電力株式会社，東京電気株式会社が経営した。台湾電力株式会社の出陳は，「雷神ロボット，日月潭の杵歌，三菱電機の製品（電扇，冷蔵庫，真空掃除器を陳列した），オートレイ装置，島田硝子製造所の製品，電気ホームの一日，電気の生立」[71]，東京電気株式会社の出陳は，「美人ロボット，高速度回転計（ストロボスコープ），サイラトロン調光装置，光線電話の実験，芝浦製作所の製品，夏の夜，電気稲荷」[72]などの場面だった。そのうち，電気ホームの１日の場面は，「午前六時朝の御炊事，午前八時朝の御化粧，午前十時御裁縫の時間，午後二時楽しい御来客，午後四時夕方の御掃除，午後七時今日の復習」[73]などの電気家庭の１日の６景が示された。

⒂　東京館は，台湾博覧会東京出品協会の経営で，その代表的出品である古河電気工業は自社の製品のほかに関係会社の製品を出陳し，10社に割り当て，場面ごとに出品の種類が違っていた。第１場面は「横浜ゴム製造株式会社の製品」[74]，第２場面は「富士電機製造株式会社および富士通信機製造株式会社の製品」[75]，第３場面は「古河鉱業合名会社および古河石炭鉱業株式会社の生産品」[76]，第４場面は「古河電気工業の製品」[77]，第５場面は「東亜ペ

68）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』394-395ページ。
69）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』398-399ページ。
70）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』399ページ。
71）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』401-402ページ。
72）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』402-404ページ。
73）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』402ページ。
74）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』405ページ。
75）　前掲74）に同じ。
76）　前掲74）に同じ。

イント製造株式会社の製品」[78]，第６場面は「旭電化工業株式会社の製品」[79]，第７場面は「日本農薬株式会社の製品」[80]，第８場面は「原町紡織株式会社の反物」[81]などだった。

⑯　専売館は，台湾総督府専売局の経営で，夜間開場の中心であった。その出陳は「久須乃木祠，樟脳杢版，脳寮模型，樟脳販路図，樟脳原木及専売局製品，製脳工程ジオラマ及香水噴水塔，専売品を原料とせる諸商品，阿片（阿片専売塔，罌粟栽培ジオラマ，阿片吸煙ジオラマの三景を分けた），塩田，各種塩及其の製品（本場面に出陳した出品物の種類は食料用塩及其の製品約十二種，工業用塩及其の製品二十二種，参考塩十種，副産物六種，合計約五十種であつた），脳寮，酒（正壁面中央には台湾及近海の地図を掲げ，図の上に〈世界に冠たり酒専売〉〈国民保健〉及〈国家財政〉の語句を書込み，尚〈台湾財政上の酒収入の位置〉と題し，専売収入，酒収入，専売以外の総督府収入，総督府経常収入等の金額を掲げて酒収入の多額なることを示した），原料材料塔，製造用器具機械類，包装用器具機械類，製品塔（島産酒二十八種，移出酒四種，移入酒二十八種，輸入酒四十八種，合計百八種の製品を陳列した），酒類の消費量，煙草工場鳥瞰，両切煙草作業室，工場事務室兼応接室，葉巻実演及煙草即売場」[82]などの場面だった。

⑰　馬産館は，台湾畜産協会の経営で，その出陳は「馬利用」[83]パノラマを第１場面，「馬利用農具」[84]を第２場面，「馬に関する各種模型」[85]を第３場面，「蹄鉄の変遷及其の他」[86]を第４場面，「馬の毒草図及其の他」[87]を第５場面とした。そのほかに，子供の馬場，馬利用定置作業，馬事講話と印刷物の配布および馬事関係映画の映写などが行なわれた。

以上の展示館のほかに，台湾茶特設館，演芸場，映画館，迎賓館，水族館，特産館，音楽堂（第２会場音楽堂での高砂族舞踊），子供の国および「基隆水族館及町内装飾，板橋郷土館，新竹案内所及競馬大会，台中山岳館，嘉義特設館，阿里山高山博物館及貴賓館，台南歴史館，高雄観光館，台東郷土館，花蓮港郷土館及タロコ宣伝」[88]の地方施設などがあった。

77）　前掲74）に同じ。
78）　前掲74）に同じ。
79）　前掲74）に同じ。
80）　前掲74）に同じ。
81）　前掲74）に同じ。
82）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』406-413ページ。
83）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』415ページ。
84）　前掲83）に同じ。
85）　前掲83）に同じ。
86）　前掲83）に同じ。
87）　前掲83）に同じ。
88）　前掲『始政四十周年記念台湾博覧会誌』719-782ページ。

3．博覧会の宣伝活動

台湾博覧会除了負責上述各館的出品勧誘以外，也担負著観客誘致的責任，為了達到最大的宣伝効果，在総務部的下面設置了宣伝係，台湾博覧会協賛会也設立了宣伝部，両会的宣伝部門毎週召開一次会議，討論有関宣伝活動的各項方針與細節。

台湾博覧会宣伝範囲的設定以台湾島内，日本内地，樺太・満洲・朝鮮・南支及南洋等地為主，為了作出適合各地区的宣伝方式，因此両会的宣伝部門決定了以下３個宣伝方針。

「① 島内：本島人知識階級には，本会開設の趣旨，目的を良く諒解せしむることを得たが，其の一般大衆には，国語普及の程度を考慮し，之が徹底には苦心を拂ひ，本会の成否を決するは，全島民共同の義務たるべき観念を馴致する様努力した。
② 内地：樺太，満鮮，南支及南洋地方と共に，島外に対しては，観客誘致を主眼とするの外，台湾事情を紹介宣伝して，之等の地方と本島との産業，文化，交通其の他将来密接なる連絡を採る為の一助たらしめた。
③ 樺太，満鮮，南支及南洋：樺太，満鮮，南支及び南洋に対する宣伝の内，南支に対するものは別に中国時文に依る文書宣伝を為したが，其の用語には特に政治的な考慮を拂ひ，南洋を目的とする宣伝には，英文をも併用して其の効果を万全ならしめた。」[89)]

台湾博覧会は，上述各館の出品・勧誘を行なうほか，観客誘致にもとりくみ，最大の宣伝効果を達成すべく，総務部のもとに宣伝係を置いた。台湾博覧会協賛会も宣伝部を設置し，両会の宣伝部内は毎週一回会議を開き，宣伝活動に関する各方針および細部について討論を行なった。台湾博覧会は，宣伝の範囲を台湾島内，日本内地，樺太・満洲・朝鮮，南支および南洋等を主とし，各地区に適合した宣伝宣伝方式を採用すべく両会の宣伝部門は以下の３点の宣伝方針を決定した。

上述の宣伝方針を決定したのち，両会の宣伝部門は各種メディアの特性を利用して，博覧会のための宣伝活動を行なった。以下に紹介するのは，文書，会報，新聞及雑誌，掲示，歌詩，放送，映画，航空，その他等の宣伝活動の概況である。

3-1　文書宣伝

台湾博覧会は，文書宣伝としては勧誘状，絵葉書および封筒，リーフレット，パンフレット，チラシ，小公学校児童懸賞作文などを主とした。

---

89)　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』429ページ。

勧誘状

勧誘状は，主として台湾島内の各種単位，機関，団体に博覧会参観を働きかけるとともに，日本内地，樺太，満鮮および南支および南洋等で台湾博覧会を宣伝することを目的とした。

台湾博覧会は1935年６月18日から11月７日まで，会名，会長名，事務総長名などにより「官公署職員見学慫慂方依頼の件，官公署職員見学慫慂方及修学旅行団其の他各種見学団体組織方依頼の件，博覧会案内及勧誘に関する件，博覧会案内及勧誘及ステツカー送付の件，観客勧誘方依頼の件，局線駅長宛観客誘致方依頼の件」[90]などの件名で９回勧誘状を発送し，その総数9,142通に達し，各界の支持を期待した。

また，各界の台湾博覧会に対する理解を広げるために，勧誘状という印刷物を郵送すると同時に，台湾博覧会出版の「〈台湾の旅〉，〈台湾博の栞〉，〈台湾博覧会概要〉，〈台湾博覧会趣意書・開設要項外各規則書〉，〈台湾博覧会会場配置図〉，〈施政四十年の台湾〉，〈台湾鳥瞰図〉，〈汽船運賃及島内鉄道賃金割引表〉，〈台湾の観光と博覧会〉，〈汽船・汽車賃金割引表〉，〈博覧会ステツカー〉，〈秋は台湾博覧会へ〉，〈基隆神戸線定期表〉，〈博覧会会場案内―改訂版〉」[91]，および近海郵船株式会社出版の「台湾の旅」[92]，大阪商船株式会社出版の「台湾へ」[93]などの小冊子を添付した。

絵葉書および封筒

台湾博覧会は，絵葉書と封筒を使って２回宣伝を行なった。第１回は「本会刊行第一次ポスター図案」[94]で，宣伝絵葉書の図案とした。その印刷数は15万枚で，５枚１組とし，製作した横封筒に入れ，主として1935年６月17日の始政記念日当日に台北市公園祝賀会の約1,800人の参列者と当日午後，総督官邸で行なわれた祝賀会の参列者2,700人に贈った。そのほか，博覧会会場遠景を第１回「宣伝角封筒」の図案とし，その印刷総数は５万枚だった。

第２回の「宣伝絵葉書」は台湾博覧会協賛会が９月に製作したもので，その図案は「協賛会募集ポスター三等入選図案（台北市宮前町吉澤初藏作）」[95]を採用し，印刷数は15万枚だった。さらに，博覧会会場遠景を第２回「宣伝和（和風）封筒」の図案とし，印刷数は５万枚で，発送対象は台北市内所官衙，学校，銀行，会社，商店，新聞社，旅館および全島州，庁，市役所，中等以上の各学校および基隆寄港船舶等の単位だった。

90） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』429-431ページ。
91） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』431ページ。
92） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』430ページ。
93） 前掲92）に同じ。
94） 前掲91）に同じ。
95） 前掲91）に同じ。

台湾博覧会が前後３回製作した各種の「封筒」には宣伝標語が印刷された。第１回は「秋は台湾博覧会へ」[96]で，総数は６万5,000枚，第２回は「伸び行く台湾　輝く記念博」[97]で，総数は12万3,700枚，第３回は「蓬莱の島に輝く記念博」[98]で，総数は３万8,900枚だった。

以上に述べたように「宣伝絵葉書および封筒」のほかに，台湾博覧会および台湾博覧会協賛会は「記念絵葉書」を発行し，発会式当日の参会者および一般参観来賓などに贈った。

リーフレット

1935年５月初旬，台湾博覧会ははじめて「台湾博の栞」[99]を発行したのち，逐次各種のリーフレットを発行し，台湾博覧会協賛会も英文・和文の各種リーフレット（表3-1）を発行した。両会が発行したリーフレットの発送対象は台湾島内，日本内地，樺太，満鮮，南支および南洋各地，その目的は台湾の宣伝紹介のほか，「台湾中心各航路船舶に配布して乗船客の渡台案内にも供し，併せて本会観客誘致の一助たらしめた」[100]。

表 3-1　1935年台湾博覧会期間中に発行したリーフレット

リーフレット名	発行者	発行期	数量（枚）
台湾博の栞	台湾博覧会	５月初旬	30,000
台湾博覧会案内―英文	台湾博覧会協賛会	６月下旬	20,000
台湾の観光と博覧会	台湾博覧会	８月中旬	40,000
秋は台湾博覧会へ	台湾博覧会	８月下旬	40,000
台湾博覧会案内	台湾博覧会	８月下旬	20,000
台湾鳥瞰図	台湾博覧会，台湾博覧会協賛会共同	９月上旬	20,000
台北市案内図	台湾博覧会，台湾博覧会協賛会共同	９月下旬	20,000
博覧会鳥瞰図	台湾博覧会	９月下旬	10,000
台北市鳥瞰図	台湾博覧会，台湾博覧会協賛会共同	10月上旬	10,000
会場案内	台湾博覧会協賛会	10月上旬	1,500,000

（出所）『始政40周年記念台湾博覧会誌』432-433ページより作成。

台湾博覧会期間中に発行したリーフレットの内容は，「台湾博の栞」は「本会及台湾紹介記事及同写真」[101]，「台湾博覧会案内―英文」は「本会及台湾紹介記事及同写真（但し英

96）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』432ページ。
97）　前掲96）に同じ。
98）　前掲96）に同じ。
99）　前掲96）に同じ。
100）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』432-433ページ。
101）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』433ページ。

文）」[102]，「台湾の観光と博覧会」は「台湾名勝写真，本会写真，台湾名所案内，同旅行日程，本会の概要」[103]，「秋は台湾博覧会へ」は「本会及台湾名勝写真，本会案内記事，台湾名勝旧跡案内，同旅行日程表，同旅費概算」[104]，「台湾博覧会案内」は「本会及台湾名勝写真，本会案内記事，台湾名勝案内記事」[105]，「台湾鳥瞰図」は「鳥瞰図（金子常光筆　台湾鳥瞰図），地図（台湾地図，日本・南支及南洋関係図），写真（本会紹介写真，台湾名勝，産業紹介写真），記事（台湾大観）」[106]，「台北市案内図」は「地図（台北市街図，草山附近地形図），記事（台北市旅館案内）」[107]，「博覧会鳥瞰図」は「第一，第二会場，分場及草山分館版画式鳥瞰図」[108]，「台北市鳥瞰図」は「鳥瞰図（吉田初三郎筆　台北市鳥瞰図），地図（台北市街図），写真（台北市名所写真其の他），記事（右写真説明）」[109]，「会場案内」は「各会場配置案内図，同案内記事」[110]であり，リーフレットの発行は，来台者に博覧会を紹介するほか，博覧会開催の機会を借りて外部に台湾各地の観光聖地を紹介し，将来の観光産業の発展に利することだった。

パンフレット

台湾博覧会および台湾博覧会協賛会は1935年６月から11月まで，数種の博覧会および台湾事情紹介のパンフレット（表3-2）を発行したが，そのうち一般旅行に関するものは，台湾総督府交通局鉄道部あるいは船会社などが寄贈し，台湾博覧会が発送したものだった。

台湾博覧会が発行したパンフレットの内容は，「始政四十周年記念　台湾博覧会概要（第一版）」は「台湾博覧会経過概要，同趣意書，同概要，会場配置図」[111]，「台湾の旅」は「台湾博覧会概要，台湾旅行案内，台北歓興案内其の他」[112]，「観光の台湾」は「台湾旅行案内記事，同写真其の他」[113]，「台湾観光指南（支那文）」は「全文北京官話，台湾博覧会概要，台湾旅行案内，台北歓興案内其の他」[114]，「始政四十周年記念　台湾博覧会概要（第二版）」

102）前掲101）に同じ。
103）前掲101）に同じ。
104）前掲101）に同じ。
105）前掲101）に同じ。
106）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』433-434ページ。
107）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』434ページ。
108）前掲107）に同じ。
109）前掲107）に同じ。
110）前掲107）に同じ。
111）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』435ページ。
112）前掲111）に同じ。
113）前掲111）に同じ。
114）前掲111）に同じ。

表 3-2　1935年台湾博覧会発行したパンフレット

パンフレット名	発行者	発行期	数量（冊）
始政四十周年記念　台湾博覧会概要（第一版）	台湾博覧会	6月中旬	20,000
台湾の旅	台湾博覧会及台湾博覧会協賛会共同	6月下旬	24,000
観光の台湾	台湾総督府交通局鉄道部（台湾博覧会依頼）	8月下旬	10,000
台湾観光指南（支那文）	台湾博覧会	9月下旬	10,000
始政四十周年記念　台湾博覧会概要（第二版）	台湾博覧会	9月下旬	30,000
施政四十年の台湾	台湾博覧会	9月下旬	10,000
台湾の現状― The Present Day Taiwan 1935	台湾博覧会	9月下旬	12,000
台湾の旅（改訂版）	台湾博覧会及台湾博覧会協賛会共同	10月上旬	5,000
始政四十周年記念　台湾博覧会会場案内	台湾博覧会	10月上旬	5,000
始政四十周年記念　台湾博覧会会場案内（改訂版）	台湾博覧会	11月上旬	30,000

（出所）『始政40周年記念台湾博覧会誌』435-436ページにより作成。

は「始政四十周年記念　台湾博覧会概要第一版に準ず」[115]，「施政四十年の台湾」は「台湾総督府編〈台湾事情〉縮刷版」[116]，「台湾の現状― The Present Day Taiwan 1935」は「台湾名勝，古跡，地理，風俗及産業等を掲示せる写真に解説（和文及英文）を附し，他に台湾事情を概記」[117]，「台湾の旅（改訂版）」は「六月下旬発行せる〈台湾の旅〉の改訂版」[118]，「始政四十周年記念　台湾博覧会会場案内」は「各会場各館内出小間別説明」[119]，「始政四十周年記念　台湾博覧会会場案内（改訂版）」は「各会場各館内出小間別説明」[120]であった。

チラシ

台湾博覧会は1935年6月中旬，「伸び行く台湾　輝く博覧会」[121]というチラシを41万枚，「御国の光四十年　輝く文化の博覧会」[122]を25万枚発行し，「本会案内，団体勧誘」[123]を宣伝

115）前掲111）に同じ。
116）前掲111）に同じ。
117）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』436ページ。
118）前掲117）に同じ。
119）前掲117）に同じ。
120）前掲117）に同じ。
121）前掲117）に同じ。
122）前掲117）に同じ。
123）前掲117）に同じ。

訴求とし，９月下旬，「来れ台北　見よ博覧会」を15万枚，「蓬莱の島に輝く記念博」を30万枚発行し，それぞれ「本会案内，鉄道賃金割引，特別入場券宣伝」[124]および「本会趣意書，会場施設，入場料，鉄道運賃割引，台北市内会場配置図」[125]を宣伝訴求とした。

以上４種のチラシのうち，「蓬莱の島に輝く記念博」が台湾全島の小公学校児童に配布され，家に持ち帰らせたほか，その他の３種のチラシは航空宣伝用として提供された。

小公学校児童懸賞作文

台湾博覧会は，博覧会の宣伝を広げるために，台湾全島小公学校児童を動員して博覧会主催の小公学校児童を作文懸賞に応募させた。その募集規程は次の通りである。

「一，題：任意。但シ始政四十周年記念台湾博覧会ニ関スルモノ

二，応募条件：（一）応募者ハ小公学校第三学年以上ノ尋常科児童ニ限ル（二）各校ニ於テ各学年毎ニ一学級一名ヅツヲ選出応募セシムルコト（三）文体は随意トス（四）字数ハ二十字詰三十行以内トス（五）用紙ハ随意トス但シ大サハ洋紙半罫紙大トス（六）毛筆又ペン書トス

三，賞：（一）小公学校別各学年別ニ優一名，良二名，可二名，選外佳作三名ヲ選定シ優，良，可ニハ記念メダル及副賞ヲ，選外佳作ニハ記念文鎮ヲ夫々贈呈ス（二）第一予選ニ当選セル応募者全部ニ本会記念絵葉書ヲ贈呈ス

四，宛先：（一）各校ニ於テ選出シタル作品ハ各郡，市又ハ各庁宛送付スルコト（二）各郡，市ニ於テ予選サレタルモノハ之ヲ各州宛送付スルコト（三）各庁及各州ニ於テ予選サレタルモノハ本会総務部宛送付スルコト

五，締切：各郡市及各庁ヘノ提出ハ昭和十年五月三十日迄，各州ヘノ提出ハ昭和十年六月十五日迄，本会ヘノ提出ハ昭和十年六月三十日迄

六，審査：（一）州之部：①第一予選：各郡，市ニ於テ小公学校別各学年別ニ一名ヅツヲ選出ス②第二予選：第一予選入選者ノ内ヨリ各州ニ於テ小公学校別各学年別ニ一名ヅツヲ選出ス③本審査：（二）庁之部：①予選：各庁ニ於テハ小公学校別各学年別ニ一名ヅツヲ選出ス②本審査：予選ノ入選者ノ内ヨリ本会ニ於テ入賞者ヲ選定ス

七，発表：（一）入賞者ハ七月十六日ノ台湾総督府府報ヲ以テ発表ス（二）優秀作ハ始政四十周年記念台湾博覧会ニュース其ノ他ニ依リ公表ス」[126]

124） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』436-437ページ。

125） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』437ページ。

懸賞募集に応募した児童の作文は，4,000篇に達した。台湾博覧会は慎重な審査を経て，「入賞者の当選作文数篇を台湾博覧会会報ニュース第八号（８月１日附）及第九号（８月11日附）に掲載発表した」[127]ほか，「八月十三日午後六時より六時半迄〈子供の時間〉に，台南放送局（JFBK），台中放送局（JFCK），台北放送局（JFAK）で児童作文リレー放送」[128]した。

3-2　会報宣伝

会報宣伝は，日本の台湾統治以来，各種の展示会あるいは博覧会で使用されてきたが，台湾博覧会においては協賛会と協力して，「会報を発行することに決定し，台湾博覧会総務部宣伝係内にニュース係を置い」[129]た。なお「其の掲載記事は時事に関係することあるを予想し，台湾新聞紙令に据る新聞とすること」[130]とした。

1935年４月19日，台湾博覧会会報は台湾新聞紙令に据る新聞としたので，次の新聞発行許可願書を台北州に供託した。

「一，題号：始政四十周年記念台湾博覧会ニュース
二，掲載事項：始政四十周年記念台湾博覧会及一般台湾事情紹介宣伝記事写真並に一般広告
三，発行時期：自昭和十年五月一日至同年十一月三十日不定期
四，第一回発行日：昭和十年五月一日
五，発行所：台北市文武町　台湾総督府構内　始政四十周年記念台湾博覧会
六，印刷所：台北市栄町四ノ三二　株式会社　台湾日日新報社
七，発行人：台北市東門町一六〇番地　須田一二三（本会総務部長）　明治三十二年一月十七日生」[131]

1935年12月19日，中川健藏総督に新聞発行許可願は５月１日「附警図秘第三，五九七号台湾総督指令を以て許可に為り，追て台湾博覧会終了後廃刊届を提出した」[132]。

126）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』436-８ページ。
127）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』440ページ。
128）前掲127）に同じ。
129）前掲127）に同じ。
130）前掲127）に同じ。
131）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』441ページ。
132）前掲131）に同じ。

会報在得到発行許可以後，従1935年４月17日の第１号（創刊）から11月30日の第18号（終刊）までの総発行部数は34万3,500部[133]に達し，主要発送対象は台湾島内，日本内地，南洋庁，関東庁，満洲国，中華民国，香港および南洋各地であった。

会報の紙面は，第15号，第18号が６面であったのを除いて，その他はすべて４面だった。その内容の編輯はたとえば次の第１号および第18号のようであった。

（第１号会報）

「第一面：記事　第一，二両会場分館及分場のアウトライン，全国水産大会，全国初等教育者大会，台鮮満対抗野球及陸上競技大会等

写真　第一次宣伝ポスター

第二面：記事　地方施設概要，第一回宣伝飛行の趣向，宣伝ラベル等

凸版　宣伝スタンプ当選図案カット

第三面：記事　産業及観光ページ――産業めぐり一〈バナナ〉，草山，北投，写真：カット〈バナナ〉，草山

第四面：全面広告」[134]

（第18号会報）

「第一面：記事　本会閉会，中川本会総裁告辞，本会商談所実績，入場券発売総数等

写真　閉会式の盛典（二葉）

第二面：記事　入場者延数，鉄道部未曾有の大輸送，輝く鉄道輸送本部，府県館の出品物殆ど売切

第三面：記事　中瀬本会事務総長事務報告，平塚本会会長式辞，児玉拓相，野口台北州知事及加々美大阪市長各祝辞，受賞者答辞

写真　平塚本会会長，中瀬本会事務総長及祝辞朗読者（四葉）

凸版　カット

第四面：記事　幣原本会鑑査委員長鑑査講評，寺内軍司令官，松岡台北市尹，松木協賛会長及島田出品人代表各祝辞

写真　幣原本会鑑査委員長及祝辞朗読者（三葉）

凸版　カット

第五面：記事　台博祭，特別入場券抽籤，催物ベストテン，受賞率良好

第六面：写真　博覧会画報（六葉）」[135]

133）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』447ページ。

134）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』442ページ。

135）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』446ページ。

会報宣伝は，外部世界に博覧会についての理解を深めさせた以外に，台湾の観光および産業などについて外部世界に再認識させ，観光客を誘致するという目的を果たす役割があった。

3-3　新聞・雑誌宣伝

まず，台湾における新聞発行の状況を述べておこう。

新聞紙法

植民地台湾では，台湾総督府のもとでマス・メディアの活動は，たとえば新聞の発行，記事の内容などに関して各種の規制や抑圧を受けた。1900年１月24日には「台湾新聞紙条例」，「台湾出版規則」，1917年12月18日には「台湾新聞紙令」などが公布された。一切の言論は台湾総督の権力下に置かれ，台湾における新聞の発行は，台湾総督府の許可を受けなければならなかった。官憲が新聞を左右する力は，すべてこの許可制度から出発していた。

植民地台湾における新聞の発行は，日本内地における届出主義と異なり，台湾総督府が「台湾総督ノ許可ヲ受クヘシ」[136]という許可主義をとったため，日本内地では刊行できたものも植民地台湾では発禁処分になったものがあった。現地では重要である時事記事でも許可がなければ報道することができないので，内地に原稿を送って内地発行の新聞に台湾島内時事記事を掲載し，これを移入し頒布するということが行なわれた。

台湾総督府は新聞の発行を制限すると共に，その表現内容についても事前検閲制をとった。「台湾新聞紙令」第10条は，「発行人ハ新聞紙ノ発行毎ニ其ノ前台湾総督府ニ二部，所轄庁及管轄地方法院検察局ニ各一部ヲ納ムヘシ」[137]としていた。

台湾の検閲制度は日本内地のように発行と同時ではなく，発行前に届出るものであった。新聞などが「発行前に検閲を受けねばならぬ」[138]という台湾においては，「発行と同時に納本すればよい」[139]という日本内地と比べ，思想・言論統制はより厳しく，極度に言論の自由が制限されていたのである。記事の表現内容に関して言えば，日刊新聞のほとんどは台湾総督府により政治的プロパガンダの道具としても利用された。

『日本新聞年鑑』（大正11年版）には，「台湾日日は総督府の府報を附録としてゐる関係上，多少御用紙的色彩あるは免がれぬ，然しそれも消極的の賛成態度で，積極的ではなく，他の

136）豊田英雄『台湾新聞総覧』関係法令編，国勢新聞社台湾支社，1936年，１ページ。
137）前掲『台湾新聞総覧』関係法令編，４ページ。
138）泉風浪『新聞人二十有五年』南瀛新報社，1936年，36ページ。
139）前掲138）に同じ。

台湾，台南二紙は反對的の気分かなり濃厚であるらしい」[140]とあるが，そうだとしても，事前検閲のためか，記事の表現内容からすれば，『台湾日日新報』のみならず，「台日紙は総督政治の支持と云ふよりは，（中略）総督政治の支持謳歌にあつて，（中略）台湾新聞，台南新報とて台日紙と大差なく，総督府の御用を勤めたり政商の手先になつたり，兎に角極めて悧巧に立ち廻つている」[141]という状況であった。

『台湾新聞』と『台南新報』２紙も，台湾総督府政治に対して消極的・反対的であったとは必ずしも言えない。要するに，植民地環境の制約のもとでは，新聞社が台湾総督府の政策に則って運営しないことには，新聞社の設立や経営は不可能かつ困難であったのである。

『台湾新聞総覧』（昭和11年版）の「新聞紙の使命」の中に「新聞紙は社会の出来ごとを報道するを本來の使命とするのであるが，一面に於ては社会教育の機関としての作用を多分に持つてゐると云へる。（中略）此の社会教育の機関としての作用は教育程度低ければ低い程重要性を有するのである」[142]と論じていることから，植民地台湾における新聞は台湾総督府の「教化」の道具としても使われたことが推察できる。ただし，新聞は「社会教育」の一環として進められたとしても，「日本化」という政治的思惑もあって，単に「陋習打破」や，「教育普及」の狙いに止まるものではなかった。

日刊紙の創刊と特色

週刊『台湾新報』は日本統治直後の1896年６月17日に創刊され，10月１日になって日刊紙として発行された。ついで，1897年５月８日，日刊紙『台湾日報』が発刊された。守屋善兵衛は1898年４月，この『台湾新報』・『台湾日報』の両社を合併し，新たに台湾日日新報社を設立し，５月６日に『台湾日日新報』第１号を発刊した。しかし，２年後には経済的困難からか台湾総督府が出資するようになり，『台湾日日新報』は事実上，御用紙になってしまった。

台湾日日新報社は台湾総督府統治の助成機関として運営されるようになり，「記事の扱ひ方は，台日は大体において官報式」[143]であった。

更に「純然たる総督府の機関紙として，克明なる官報の延長であつた」[144]とあるように，同紙は毎号「台湾総督府府報」，「台北州庁州報」，「台北市役所市報」などを付録として添付

140）『日本新聞年鑑』新聞研究社，1922年，124ページ。
141）前掲『新聞人二十有五年』470ページ。
142）前掲『台湾新聞総覧』新聞批判編，１ページ。
143）「新聞評論［台湾日々の巻］」『台湾実業界』1929年10月号。
144）「新聞評論［台湾新聞の巻］」『台湾実業界』1930年２月号。

し，台北だけではなく台湾全土に進出した。

なお，特設の漢文欄は台湾本島人だけでなく南支・南洋の支那人に広く愛読された。そのため，その発行部数は，ほかの地方紙とは比べものにならないくらい多かった。

1901年５月１日には『台中毎日新聞』が第１号を発刊し，1903年３月に『中部台湾日報』と改題され，更に1907年10月には『台湾新聞』となった。

『台湾新聞』は経済記事において出色であり，販売拡張のために，各郡において紹介号を発行して各地の民情風俗産業その他を詳細に報道した。また年中行事として台湾全島庭球大会，全島カルタ大会，水泳，演芸，少年野球，その他何事にも台湾全島大会を催して宣伝に努めた。また毎年，『台湾糖業年鑑』を編集発行した。同紙は，内地はもちろん，南支・南洋各地に出張所を置いて海外広告を扱った。この『台湾新聞』は台中・新竹両州報と台中市報とを握っており，両州を主な勢力範囲としていた。

『台南新報』は，1903年１月１日に台南市において創刊された。「台湾に於る商業の繁栄地又糖業の樞要地に於ける報道機関であつた」[145]ためか，「本島の主要産物たる米糖に関する精細緻密なる報道に至つては本紙の異彩として特に誇りとする」[146]と評価されていた。『台南新報』は従来南方開発の急先鋒を以って自任し，台湾本島文化の普及，産業の啓発に貢献した。所在地の関係上，砂糖の記事については抜群で，台湾の経済記事に特色があった。『台南新報』は南部台湾に優越なる勢力を形成し，南支・南洋その他各地において大いに歓迎され，好評を博した。同紙も「台日，台湾両紙を相手に戦つて来た訳であるが，何よりも府報を握つて居る台日が仮装敵である事云ふ迄もなかつた」[147]。『台湾日日新報』の夕刊は南部まで刊行されていたが，あまりにも遅れた記事が多かったため，やはり『台南新報』の方が優勢であった。

はじめ『台南新報』の「東部付録」であった『東台湾新報』[148]は，1923年10月１日に日刊紙として独立し創刊された。「東台湾新報はとんと儲からぬ新聞であつた」[149]。経営としては「花蓮港，台東両州庁の庁報を出して居るから，官庁及公共団体等の販路が行届くだけは行届かせてあるにしても，紙数は高の知れたものである。従つて広告料でも高の知れたものと云ふ事なのであつた」[150]。

『台湾日日新報』，『台湾日報』，『台南新報』および『東台湾新報』の４新聞紙は，「幾ら初

145）　前掲144）に同じ。
146）『新聞総覧』日本電報通信社，1931年，459ページ。
147）「新聞評論［台湾新聞の巻］」『台湾実業界』1930年３月号。
148）　前掲『日本新聞年鑑』1926年，95ページ。
149）「新聞評論［台湾新聞の巻］」『台湾実業界』1930年５月号。
150）　前掲149）に同じ。

代文官総督の田健治郎が議会で聲明したと云つても，御用新聞である事間違ひなく，又御用紙なるが故に存在の意義があると云へば云へぬ事はない」[151]と評された。

『高雄新報』は1934年４月に週刊紙として発刊され，1937年８月１日に日刊紙として発行された。

以上の『台湾日日新報』，『台湾日報』，『台南新報』，『高雄新報』および『東台湾新報』の５紙とも日本人の経営によるものである。

それに対して，1920年７月に東京で発刊された『台湾青年』（1922年に『台湾雑誌』と改題）は，1927年８月には，唯一の台湾本島人本位の言論機関として『台湾民報』と改題された。同紙の発行に際し，泉風浪は次のように述べている。

「所謂日刊紙は何としても官僚や資本閥の代弁を勤めると言つてよいソノ中にあつて新民報は自社の関係もあるだろうが，兎に角新民報を発揮して勇敢にやつてのけてゐる処はスコブル痛快である」[152]。

この『台湾民報』は1932年４月15日に日刊『台湾新民報』と改題された。「日刊許可アテ込みの為に組織した台湾新民報なる株式会社に乗り移つた迄，内容に於ては従つて改題以来と雖も，編輯上には少しの変化もなかつたと云ひ得る」[153]のであった。

『台湾新民報』が植民地台湾で発行できたのは，総督府側にも「台湾島民多数の意見を発表する機関の存在することは，為政者の参考資料を得るの見地からも，また島民教化の上からも有益である」[154]という算段があったためと見られるが，『台湾新民報』の日刊発行が許可された一因としては，1932年12月21日に行なわれた『台湾新民報』の幹部の陳情も関係があったものと思われる。

このような経過で，1935年までに植民地台湾における新聞は刊行されていった。

台湾で創刊された新聞（地元紙）といっても，言語上，もしくは経済上の問題もあって，購読する台湾人は極めて少なかったため，主に台湾および海外滞在の日本人を対象としていた。そのことは，たとえば，『台南新報』の「本紙は産業開発，商権開拓者の最好伴侶である」[155]というアピールや，唯一の台湾人経営で「本島人本位の新聞」[156]と宣言していた 『台

151）「新聞評論［台湾新聞の巻］」『台湾実業界』1929年５月号。
152） 前掲『新聞人二十有五年』352ページ。
153） 台湾総督府編『台湾日誌』（復刻版）緑蔭書房，1992年，287ページ。
154） 神田正雄『動きゆく台湾』海外社，1930年，58ページ。
155） 前掲『新聞総覧』1935年，448ページ。
156） 前掲『新聞総覧』1935年，451ページ。

湾新民報』もキャッチフレーズを「全島文化を指導する／内地人必読の新聞」[157]としたことにも表れている。

当時の台湾各紙では，地元商品業者の広告より日本内地商品業者の広告の方が多かった。商品のイメージアップのため，各紙とも広告コピーに工夫を凝らした。

日刊紙の発行部数と読者層

新聞発行部数と新聞読者層について，『日本新聞年鑑』は，次のように述べている。

「現在は六種であるが，その総発行部数は，内地人経営の五紙合せて約八万，台湾新民報二，三万として合計十一万，これが九十万世帯に対する地元紙の総発行部数である。（中略）約八万の内地人経営紙は約三十万の内地人を読者層とし約二，三万の本島人経営紙は約五百三十万の本島人を読者層とする。本島人読者層の如何に薄きかを察すべきである」[158]。

『台湾新民報』について言えば，1930年の段階では，「一ページが広告，二ページから九ページ迄が漢文で，十ページから十二ページ迄が和文」[159]であり，大体において漢文紙の体裁をとっていた。1934年の段階では，「夕刊と合せて十二ページ中に，漢文七ページ，和文五ページであつた」[160]。『台湾新民報』の特色は漢文面の多いことと和文にルビをつけないことであった。さらに「支那に関する記事に力瘤を入れたことである。（中略）自治問題特に力瘤を入れて華かに記載する」[161]。また，「日曜附録は，全文和文で地方色がよく出て居て面白かった」[162]。

しかし，「常に経営難だと云はれ，内地広告は少なし，台湾島内広告も多くないが，（中略）四百万の台湾人を対象とする日刊紙」[163]であり，その発行部数２～３万部は台湾人のみによって購読されたものではない。

「台湾の読者層と云ふものは大体に於て決まつてゐる。つまり五百万島民と云ふ者の，

157）前掲156）に同じ。
158）前掲『日本新聞年鑑』1941年，117ページ。
159）「新聞評論　昭和　新民報の対立」『台湾実業界』1930年６月号。
160）「新聞評論 近頃の日刊紙を語る」『台湾実業界』1934年11月号。
161）「新聞評論［台湾新聞の巻］」『台湾実業界』1934年11月号。
162）前掲161）に同じ。
163）前掲161）に同じ。

新聞の購読者は，ホンの一部のインテリー階級だけであつて，あとは全然新聞を読まない，否読めない階級が多数を占めている」[164]。

しかし，一方で，1925年版の『日本新聞年鑑』は，『台南新報』について，次のように述べている。

「今こそ読者の七八分までは内地人であるが，新教育を受けた台湾人は和文を解するから，そこに将来の希望がある」[165]。

『日本新聞年鑑』によれば，1941年においても，台湾人が新聞に接触する機会の少なかったことがうかがわれる。それは，州令の公布紙として指定された地元紙への関心が薄かったからではなく，台湾人の中には識字能力を有する「知識人」がそれほど多くはなかったことと，経済的にも余裕がなかったためであろう。

実際，『台湾新民報』以外の新聞は，部数は少数であったが，台湾人の読者もいた。

『台湾日日新報』は，台湾全島を主とし日本内地各地にも配布しており，『台湾新聞』『台南新報（台湾日報)』の２紙と共に南支，南洋，満鮮方面にも相当の読者を持っていた。しかし，新聞を購読した台湾人が極めて少なかったため，『台湾新民報』を除き，日本人が対象となっていた。

1924年頃，『台湾日日新報』，『台湾新聞』，『台南新報』３紙の発行部数は３紙合計で４万前後[166]と推定されるが，『日本新聞年鑑』，『新聞総覧』および『万年社広告年鑑』とも，残念ながら，読者層別の資料はほとんどなく，総発行部数しか記載されていない。各新聞の推定発行部数は，表3-3に示されている。ただし，いずれも推定か自称の数字である。

1935年当時，日本人系新聞が大小20数種あったのに対し，台湾人経営の新聞は僅かに『台湾新民報』１紙のみであった。台湾総督府は植民地社会の文化状況に即して考えるのではなく，「思想・言論統制の目的」から，新聞の発行を制限したのである。

164） 前掲『新聞人二十有五年』484ページ。
165） 前掲『日本新聞年鑑』1925年，76ページ。
166） 前掲『日本新聞年鑑』1924年，24ページ。

表 3-3　1924～1935年まで台湾において発行された新聞と年次別発行部数の推移

	台湾日日新報	台湾新聞	台南新報	東台湾新報	台湾新民報	高雄新報
1924年	18,970	9,961	15,026	—	—	—
1925年	—	—	—	2,352	—	—
1926年	—	13,000	14,000	—	—	—
1927年	—	15,000	26,500	—	—	—
1929年	—	—	23,600	—	—	—
1930年	—	15,000	—	2,600	—	—
1932年	—	15,000	—	—	—	—
1933年	—	20,000	—	—	25,000	—
1935年	49,952	30,000	25,386	—	33,772	—

（出所）　1933年までの統計は『日本新聞年鑑』，『新聞総覧』，『万年社広告年鑑』各年度復刻版；1935年は『台湾総督府統計書』各年度により作成。

新聞利用

以上に述べたように，日本による台湾統治開始から1935年まで台湾で発行された新聞は，６大日刊紙の発行部数合計で13万を超え，購読者も台湾島内以外にも，南支・南洋等の地に及んでいた。それゆえ，台湾博覧会は「新聞の利用は，宣伝の最も効果的方法であることは云ふ迄もない（省略）一般新聞への広告は，能ふ限り広範囲に亙つて之を為した」[167]と考え，1935年８月18日，10月６日および27日，台湾島内発行の18紙のほか，日本内地発行の31紙，朝鮮発行２紙，満洲発行７紙，中華民国発行３紙および香港発行１紙の計62紙（表3-4）を選定し，これらに図案または記事を掲載して台湾博覧会開設の要領を広告しあるいは台湾本島紹介などを行なった。

そのほか，雑誌への広告も新聞と日を同じくして，会期前および会期中において前後３回にわたり，台湾島内の「『台湾実業界』，『新台湾』，『台湾パツク』，『台湾婦人界』，『台湾芸術新報』，『台湾理容界』」[168]，日本内地の「『交通時代』，『国鉄時報』，『経世春秋』，『民衆時論』，『新聞ト社会』，『コンテンポラリジヤパン』，『日満新興文化協会誌』，『実業展望』，『水産通信』，『財界之日本』，『実業時代』，『拓殖新報』，『実業之世界』，『東邦経済』」[169]，満洲の「『内外経済情報』，『満洲文化協会誌』」[170]の計22誌を選定し，図案広告および宣伝記事などを掲載して，台湾博覧会の開催と台湾本島の紹介，台湾博覧会の紹介宣伝を行なった。

167）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』450ページ。
168）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』451ページ。
169）　前掲168）に同じ。
170）　前掲168）に同じ。

表 3-4 台湾島内，日本内地，朝鮮，満洲，中華民国，香港など62新聞紙名

発行地	新聞名
台湾島内	台湾日日新報，台湾新聞，台南新報，台湾新民報，東台湾新聞，台湾経世新報，新高新報，南日本新報，南瀛新報，昭和新報，台湾時事新報，台湾経済タイムス，南海時報，高雄新報，東亜新報，新聞ノ新聞，台衛新報，電報通信台湾支局15周年記念号
日本内地	東京朝日新聞，東京日日新聞，大阪朝日新聞，大阪毎日新聞，電報通信，新聞聯合通信，時事新報，報知新聞，読売新聞，中外商業新報，国民新聞，二六新報，中央新聞，やまと新聞，東京毎夕新聞，萬朝報，都新報，帝国新報，大阪時事新報，大阪毎夕新聞，合同通信，東海通信，日刊台湾通信，日本会社新聞，神戸又新，関門日日新聞，日刊東洋民報，熊本日日新聞，九州魁新聞，国勢新聞，大分新聞
朝鮮	京城日報，大邱日報
満洲	満洲日報，満洲日日新聞，奉天日報，奉天日日新聞，盛京時報，新京日日新聞，新京日報
中華民国	福州閩報，厦門全閩新日報，上海日報
香港	香港日報

（出所）『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』450-451ページにより作成。

3-4 掲示宣伝

台湾博覧会の宣伝は，ポスター，看板，電飾および映画館幻灯広告，連続三角旗，気球，雪洞などの方式を主とした。

ポスター

台湾博覧会宣伝用の第１回および第２回のポスター図案は，東京在住の専門家塚本閤治がデザインしたもので，第１回ポスターの発行は1935年２月末，数量は３万2,000枚であり，「日本領土に二万七千枚，南支千五百枚（始政四十周年記念の文字を削除），南洋に千五百枚（英文），鉄道各駅無料掲載用二千枚（鉄道関係記事入り）」[171]に配布し，第２回ポスターの発行は６月末，数量は２万500枚で，「日本領土に一万六千枚，南支に千枚（始政四十周年記念の文字を削除），南洋に千枚（英文），鉄道各駅無料掲載用に二千五百枚（鉄道関係記事入り）」[172]を配布し，第３回ポスターの図案は対外に公開募集方式をとり，応募者は台湾島内のほか，日本内地の大阪，京都，東京方面からあり，台湾博覧会は６月10日および７月４日両日，厳選の結果，40余件の応募作品から京都市伏見区深草町在住の藤佐木繁の作品を１等に選び，台湾博覧会協賛会宣伝部は１等作品に対して次のような評語を発表した。

171） 前掲168）に同じ。
172） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』452ページ。

「一等当選図案は明朗な青地に黒金の逞しい双手を挙げて会場を高く持上げ内外に我等の博覧会を誇示するといふ簡潔な線を駆使した感覚的なもので，〈見よ躍進の台湾博〉の文字が力強く入れられてゐる。」[173]

第３回ポスターが好評を博したので，８月４日貝山総務係長が日本内地に持ち帰るとともに，９月には関係単位にそれぞれ配布された。台湾島内では８月下旬に印刷され，数量は２万5,000枚で，「一般配付用二万二千五百枚，鉄道各駅無料掲載用二千五百枚（鉄道関係記事入り）」[174]を配布した。宣伝用ポスターは計３回発行された。印刷は出来ばえがよく，各界の好評を博し，博覧会の宣伝に寄与した。

看板

1935年６月中旬，台湾博覧会は鉄道旅客に宣伝を行なうため，台湾全島鉄道沿線の台北州七星郡内湖庄松山療養所付近，新竹州中壢郡楊梅庄楊梅駅付近，台中州大甲郡大肚庄南王田駅付近，台南州嘉義郡水上駅付近八掌溪嘉南大圳水橋，高雄州岡山郡左営庄半屏山麓，花蓮港庁花蓮支庁寿区鯉魚山麓など６地点を選び，「トタン張り，ペイント塗り，赤地白文字〈秋〉〈台〉〈湾〉〈博へ〉の四字は各九尺角にし，〈は〉の一字は六尺角とす，右五枚一組」[175]とする鉄道沿線の立看板を使用し，「秋は台湾博へ」[176]によって鉄道旅客の注目を引いた。

続いて，台湾博覧会は1935年10月上旬から中旬にかけて，立看板および貼付用看板を設置して台湾島内幹線鉄道各駅，各郡役所，支庁所在地および屏東，嘉義，彰化，桃園，宜蘭，花蓮港，台東，高雄，台南，台中，新竹，基隆の各市街などに広げたので，台湾島内全部をおさめ，鉄道乗客でありさえすれば誰でも宣伝看板を見られるようになった。

また，台湾博覧会は1935年７月上旬，日本内地の省線秋葉原駅付近および市電日本橋交叉点付近に東京宣伝用貼附看板２枚が設置され，東京人にも台湾博覧会の気分を味わわせ台湾訪問を誘うことを狙った。

電飾及幻灯

台湾博覧会は，1935年７月から博覧会閉会の日まで，当時の東京市京橋第一相互館屋上に

173）『始政四十年周年記念台湾博覧会協賛会誌』始政四十年周年記念台湾博覧会協賛会，1939年２月27日，70ページ。
174）前掲172）に同じ。
175）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』453ページ。
176）前掲175）に同じ。

電気スカイサインを設置し，「電光文字〈秋は台湾博覧会へ（会場台北）〉」[177]で人目を引いた。台湾博覧会協賛会宣伝部は，台北，基隆の駅付近でも，それぞれ60尺と100尺の木造ネオン広告塔を設置し，当地の夜に美観を添えたのであった。

そのほか，台湾博覧会は1935年６月中旬から８月上旬まで，極彩色幻灯スライド数種を製造し，台湾島内，日本内地，満洲などの地の映画館（表3-5）で休憩時間に放映した。

表3-5　台湾島内，日本内地，満洲等地の映画館所在地および映画館名

放映時期	映画館所在地	映画館名
６月17日	東京	日比谷公会堂
６月中旬～８月上旬 （幻灯スライド４種映写）	名古屋	松竹座，八重垣劇場
	福岡	友楽館
	新京	新京キネマ
	奉天	平安座
６～９月の各中旬，10月上旬に於て各１週間ずつ昼夜２回 （幻灯スライド５種映写）	台北	新世界館，第二世界館，太平館，永楽座，芳乃館
	基隆	世界館
	新竹	有楽館
	台中	娯楽館
	台南	世界館，宮古座
	高雄	高雄座，金鵄館
	屏東	末広館
	花蓮港	筑紫座
	彰化	彰化劇場
	嘉義	電気館

（出所）『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』454ページにより作成。

連続三角旗・気球・雪洞宣伝

台湾博覧会協賛会宣伝部は，1935年９月下旬から閉会日まで，台湾島内乗合自動車内で宣伝を行ない，「十八旗連続のもの〈歓迎始政四十周年記念台湾博覧会協賛会〉」[178]および「十旗連続二連一組のもの〈歓迎始政四十周年記念〉，〈歓迎台湾博覧会協賛会〉」[179]を製作した。「十八旗連続のもの」は，無料で台北市営バス，草山バス，その他小型バスに配布し，「十旗連続二連一組のもの」は同じく無料で局営バスに配布し，計640組作製した。そのほか，台

177）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』454ページ。
178）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』455ページ。
179）前掲178）に同じ。

湾博覧会協賛会宣伝部は，「本会の宣伝に遺漏なきを期する」[180]べく，1935年10月１日から閉会日まで，毎日，台北市の上空にアドバルーンをかかげ，博覧会のための宣伝を行ない，また雪洞という宣伝方式を用いて博覧会のために花を添えた。

3-5　歌詩宣伝

1935年５月25日，台湾博覧会協賛会宣伝部は，博覧会を幅広く宣伝するため，宣伝歌歌詞懸賞募集活動を行なった。その募集要項は，次の通りである。

「一　歌詞：（A）歌謡曲一篇，題目随意，台湾情緒を主とし，特に博覧会に触れる必要なし（B）行進曲一篇，題目躍進台湾博覧会を宣伝し，台湾の躍進を謳歌す（註）ABとも字句，節，囃子等随意なるも，各レコード一面に吹込み得ること
二　賞金：当選作（A）一篇，金一〇〇圓（B）一篇，金一〇〇圓
選外佳作（A）二篇，金二〇圓（B）二篇，金二〇圓
三　締切：昭和十年五月二十五日」[181]

台湾博覧会協賛会は，応募歌謡曲157曲，行進曲25曲から，それぞれ佳作歌謡曲３曲および行進曲３曲を選んだ。歌謡曲３曲の作者は，小松忠文，柴田純，眞岡静思，行進曲３曲の作者は小松忠文，渡辺三星一，宇野直一郎であった。当選の６曲の作品中，小松忠文の歌謡曲「台湾よいとこ」[182]，行進曲「躍進台湾」[183]は，首席に推され，「佐藤惣之助氏の補筆を受けて，コロムビアレコードに吹込まれることと為つた」[184]。当選の作品は，それぞれ賞金50円を得たほか，レコードに吹きこまれ，「台湾全島の料理屋，カフエー，喫茶店，活動常設館，新聞社」[185]および「東京，大阪，大連の台湾物産紹介所，全国各地の放送局」[186]に贈られた。これらのレコードは，台湾全島のレコード販売店から売り出され，街頭に家庭に台湾博覧会宣伝の歌謡曲が氾濫して博覧会気分を一気に盛りあげた。

180）前掲178）に同じ。
181）前掲178）に同じ。
182）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』457ページ。
183）前掲182）に同じ。
184）前掲182）に同じ。
185）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』475ページ。
186）前掲185）に同じ。

3-6 放送宣伝

ラジオ放送局の開設と運営

日本統治下の台湾のラジオ放送は，1925年６月17日，台湾総督府始政30周年の記念展覧会における10日間にわたる50ワットの試験的放送を嚆矢とする。その後，日本内地のラジオの発達は台湾島内の聴取希望者をも増加させた。台湾総督府交通局逓信部は，このような状況を見て，1928年10月に庁舎の一部を改造して放送設備を施し，同年11月１日より１キロワットの「試験放送」を開始した。結果は非常に良好で，同年11月22日より「実験放送」に移り，施設許可料および聴取料はともに無料としたので，出願者は続出し，1929年４月に出願者数8,000世帯を超え，年末にはその出願者数は9,000世帯に達した。

台湾における放送事業は，昭和天皇即位に際し記念事業として計画された台北放送局の10キロワット放送が1931年１月22日に始められ，同年２月１日から本格的放送事業が開始され，同時に公益社団法人「台湾放送協会」が誕生した。台湾総督府は，台湾の特殊事情を考慮して，放送事業は総督府交通局逓信部が運営管理することに決定し，番組の編成・演出，聴取者の勧誘，受信機の修理，聴取障害に対する処置などの放送業務は，台湾放送協会に委託経営させることになった。放送事務の指導監督は逓信部の専管であった。ラジオ聴取料は月額１円の有料とした。

台湾総督府は，南部の聴取状況を改善するため1932年４月１日に台北放送局で実験放送に使用した１キロワット放送設備を台南放送局に移設した。その結果，台南・高雄両州および澎湖庁一帯を聴取区域とする台南放送局が開局され，５日間開局記念放送が行なわれた。台南放送は，台北からの無線中継を主とした。同年６月26日より，毎月第４日曜日の午後５時半から１時間にわたり，「国語普及の時間」として青年団員国語講習会員等の唱歌，談話などを放送することとなった。

一方，台南放送局が開設されても，中部地方の受信状態はあまり改善されなかったため，1935年２月４日に台中放送局の上棟式が行なわれ，同年５月11日に開局式が行なわれた。台中放送局開局と同時に３局間の有線中継が始まった。同時に台南放送局の中継受信所は廃止された。３放送局の本格放送開始日は表3-6の通りである。

表3-6 ３放送局の放送開始日

放送局	電力	放送開始年月日
台北放送局（JFAK）	10KW	1931年１月22日
台南放送局（JFBK）	１KW	1932年４月１日
台中放送局（JFCK）	１KW	1935年５月11日

（出所） 台湾総督府『台湾日誌』（復刻版）緑蔭書房，1992年；『台湾年鑑』台湾通信社，1938年12月により作成。

1934年７月，日本放送協会・東京中央放送局が国際電話株式会社の長崎送信所を利用して短波による台湾，樺太，朝鮮，関東州，満洲，南洋などの「外地向け」放送を開始した。その短波受信によって，日本内地番組は台湾本島でも聴かれるようになり，台湾の聴取者にとって「大なる福音」と受け止められた。また，毎月１回台湾から日本内地へ送出できるようになり，台湾本島が広く紹介されるようになった。

元来，台湾の放送事業は台湾本島聴取者に限らず，中国南部・南洋在住の日本人にも利用され，日本語による唯一の報道および娯楽機関となった。

一方，1932年６月15日，台湾放送協会は台北放送局を通じて海外放送を行なうと共に，日本最初の「広告放送」を実施した。

『ラジオ年鑑』（1933年版）によると，「放送に依る広告は放送の持つ職分の一分野である。内地や他の植民地では之れを禁止してゐるが，台湾に於ては放送協会設立の際定款に挿入し許可を得たけれども，欧米現行の広告方法を其の侭採用するには不適当な点もあり協会創立後種々研究をなし愈々昭和七年六月から六箇月間試験的に実施して其の結果によつて本格的広告放送に移ることゝなつた」。しかしながら，広告放送は「新聞の広告収入を圧迫する」[187]という理由で，台北放送局が開始した広告放送は間もなく日本新聞協会の反対を受けた。

また，『台湾日日新報』，『台南新報』，『台湾新報』３紙社長の熱烈なる反対運動も奏功し，ついに1932年12月２日に中止された。そして，それは終戦まで続いた。広告放送は結局，半年足らずで終わったが，日本の広告放送史においていくつか特筆すべき意義があったと言えよう。その一つは，はじめての広告放送であり，一つは日本新聞協会の干渉をまねいた結果として，中止に至ったという点である。

日本新聞協会の反対は，「台湾の新聞社のため」ではなく，「台湾の広告放送が内地に波及して実施されるようになれば，新聞広告を減少させ，新聞社の経営を圧迫する恐れがあるとして，放送広告に反対する」[188]という理由からであった。

台湾本島の「広告放送」が始まった1932年の受信者世帯である。同年８月の受信者世帯は11,880世帯であった。このうち，日本人世帯は9,993世帯であったのに対し，台湾人世帯は1,887世帯であった。

1932年６月に広告放送番組が始まった時点の受信者世帯は，1931年度より4,498世帯増加した。しかし，広告放送番組が同年12月に中止された後の1933年度にも，前年より1,494世

187）林二郎「新公園」『台湾時報』1940年10月号。内川芳美『日本広告発達史』上巻，電通，1976年，343-348ページ。『放送五十年史』89ページ。『日本新聞年鑑』1932年，56ページ，58ページ。『ラジオ年鑑』1933年，680-682ページ。

188）内川芳美『日本広告発達史』上巻，電通，1976年，347ページ。

表 3-7 1928～1935年度別ラジオ聴取者世帯

年度	日本人	台湾人	合計
1928	不明	不明	7,864
1929	不明	不明	9,400
1930	不明	不明	4,713
1931	7,609	1,395	9,004
1932	10,947	2,555	13,502
1933	11,917	3,079	14,996
1934	13,884	3,616	17,500
1935	18,032	4,992	23,024

（出所） 1931年，1933-1935年までは台湾総督府『台湾事情』（1940年版）；1932年は日本放送協会『ラジオ年鑑』日本放送出版協会（1940年版），台湾放送協会『事業並会計報告書』により作成。

帯増えている。さらに1935年度は前年度より5,524世帯増（表 3-7）であったという点に注目すれば，受信者世帯の増加には，広告放送番組（娯楽番組）の有無は重要ではなく，文化向上等の社会的要素の方が大きかったものと考えられる。

ラジオの聴取料は月額１円で，新聞６紙平均で月極１円35銭（1932年当時）の新聞購読料より安かった[189]。ラジオ受信者も新聞の購読者と同じく日本人が多数を占めていた。それは，主に日本語による放送が行なわれ，番組の多くが内地人向きであったからと考えられる。

1931年には，日本人受信者世帯が約85％（小数点以下４捨５入，以下同様）であったのに対し，台湾人受信者世帯は15％と圧倒的に日本人受信者世帯の割合が大きかった。しかし，年を追う毎に台湾人受信者世帯の割合が高まり，３年目の1933年には20％を超えた。購読者・受信者は少数であったが，戦前の台湾本島人の文化向上にラジオと新聞の果たした役割は否定できないのであった。

放送利用

台湾博覧会は「本会開設の趣意が，全島民をして過去四十年の成績を再検討し，将来の計画に資せしむると共に，広く内地人士及南支南洋人に対し，台湾に関する適正なる認識を興ふるに資せんとするにあるに鑑み」[190]，台湾放送協会においても，博覧会会期前ならびに会期中における台湾本島放送は，博覧会ニュース，講演，子供の時間，運動競技実況中継，台

189） 日経広告研究所『日経広告研究所報』190号，2000年４月１日，49ページ。
190） 前掲185）に同じ。

湾音楽，などの放送番組は，台湾博覧会に関し非常に濃厚なる宣伝的色彩を示した。その会期前および会期中において実施した台湾博覧会関係放送事項は次の如くである。

全国出中継

1935年８月以降，台北放送局は毎月１回台湾本島からの日本内地，朝鮮，満洲などの外地向け中継放送を開始し，台湾本島が広く紹介されるようになった。

台北放送局外地向け中継放送の番組を列挙すると次の表3-8の通りである。

表3-8　台北放送局外地向け中継放送の内容

放送月日	放送時間	放送内容
８月11日（日曜）	17:00～17:25	「お話　媽祖」 伊藤康寿 （台湾音楽伴奏附）
９月８日（日曜）	18:30～19:00	「台湾観光唄の旅」 ガジュマル放送楽団 放送指揮　安西照美
10月13日（日曜）	18:30～19:00	講演「台湾香料工業の将来」 台湾総督府中央研究所技師　理学博士　加福均三
11月10日（日曜）	17:00～17:25	お話「砂糖」 台湾総督府殖産局技師　土井季太郎

（出所）『始政40周年記念台湾博覧会誌』476ページにより作成。

台北放送局外地中継は台湾の歴史伝説および産業などに関するものを主とし，台湾の紹介に努め，聴取者皆の好評を博した。

台湾島内放送

台湾島内放送の番組は，台湾博覧会関係ニュースを速報し，博覧会気分を横溢させる目的を持って，会期前はだいたい毎週２，３回，会期中は毎晩ニュースの時間に，台北，台中，台南３放送局より一括放送した。また，来台の台湾博覧会関係諸名士に講演を依頼し，台北放送局より（台中，台南中継）放送した（表3-9）。

子供の時間（自午後６時00分至午後６時30分）は，８月11日に行なった全国出中継による伊藤康寿先生の媽祖の話のほかに，台湾島内放送として，８月13日（火曜）に次の番組（表3-10）を編成し，子供たちにも博覧会の趣旨を徹底させた。

台湾博覧会は毎日曜日の台北放送局子供新聞にも適宜博覧会関係のニュースを挿入して，児童に平易に博覧会に対する趣味を喚起させた。

また，運動競技実況中継は台湾博覧会を機として行なわれた満洲，朝鮮，台湾対抗陸上競技および野球の実況放送で，次の表3-11の如くである。

表 3-9　来台の台湾博覧会関係諸名士による講演の放送内容

放送月日	放送時間	放送内容
9月25日（水曜）	18:30〜19:00	「博覧会に就て」　台湾総督府殖産局商工課長　須田一二三
10月13日（日曜）	19:00〜19:25	「東京市場より見たる蓬莱米」 内閣米穀統制調査会委員　上田彌兵衛
10月24日（木曜）	18:30〜19:00	「渡台に際して」　貴族院議員　永田秀次郎
10月26日（土曜）	18:30〜19:00	「我国に於ける最近の財政問題」 京都帝大教授　法学博士　汐見三郎
10月28日（月曜）	17:25〜17:55	「満洲国の動向」　満洲国外交部事務官　外間政恒
10月31日（木曜）	18:30〜19:00	「南洋水産振興に就いて」　南洋水産協会理事長　高草美代藏
11月２日（土曜）	18:30〜19:00	「報恩生活」　貴族院議員　大谷尊由
11月７日（水曜）	18:30〜19:00	「国体明徴の意義」　日蓮宗本妙寺貫主　塩出孝潤
11月10日（日曜）	18:30〜19:00	「父なる神」　救世軍日本連合司令官　ビクターロルフ 通訳　本営附少佐　渡辺林太郎
11月11日（月曜）	18:30〜19:00	「国際平和記念日を迎へて」　長尾半平
11月24日（日曜）	18:30〜19:00	「子供の教育」　衆議院議員　安部磯雄
11月29日（金曜）	18:30〜19:00	「台湾の季感」　大阪市産業部主事　入江来布

（出所）『始政40周年記念台湾博覧会誌』により作成。

表 3-10　綴方朗読―台湾博覧会にちなむもの

放送内容・朗読者	放送局
「台湾博覧会」嘉義小学校五年・福田幸子	台南放送局より（台北，台中中継）
「始政40周年を迎へて」麻豆小学校五年・山下貞代	同上
「台湾博覧会」高雄第一小学校六年・福田敏彦	同上
「博覧会」台南山上公学校四年・傅承志	同上
「家のほこり」麻豆公学校六年・林永銘	同上
「台湾博覧会」南投小学校四年・山本忠和	台中放送局より（台北，台南中継）
「博覧会」溪州小学校五年・上小牧一郎	同上
「秋の博覧会へ」東勢公学校六年・劉進発	同上
「台湾博覧会のポスターを見て」淡水小学校四年・高橋宜子	台北放送局より（台中，台南中継）
「台湾博覧会」新店小学校六年・金沢裕子	同上
「博覧会」中壢公学校四年・游祥煥	同上

（出所）（『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』477-478ページにより作成。

表 3-11　運動競技実況中継

放送月日	放送時間	放送内容	台北，台中，台南３放送局
10月17日（木曜）	14:10～16:13	満洲，朝鮮，台湾対抗野球大会第１日（台北対朝鮮）	台北市圓山球場より中継（３局共）
10月19日（土曜）	13:20～15:55	満洲，朝鮮，台湾対抗野球大会第２日（朝鮮対満洲）	台北市圓山球場より中継（３局共）
10月20日（日曜）	12:02～14:14	満洲，朝鮮，台湾対抗野球大会第３日（台北対満洲）	台北市圓山球場より中継（３局共）
10月22日（火曜）	14:43～16:54	朝鮮野球団対台中 CP 団	台中市水源地球場より中継（３局共）
10月27日（日曜）	14:25～17:00	朝鮮野球団対台南団	台南中市球場より中継（３局共）
11月14日（木曜）	20:50～21:20	拳闘試合	第２会場演芸館より中継（３局共）
11月16日（土曜）	13:13～16:13	満洲，朝鮮，台湾対抗陸上競技大会第１日	台北帝大競技場より中継（３局共）
11月17日（日曜）	12:50～16:18	満洲，朝鮮，台湾対抗陸上競技大会第２日	台北帝大競技場より中継（３局共）
11月20日（水曜）	12:30～16:00	満洲，朝鮮，台湾対抗陸上競技大会	台南高工競技場より中継（３局共）

（出所）『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』478-479ページにより作成。

実況中継

博覧会の最初の実況中継は，10月10日（木曜日）午前９時30分から午前10時03分まで行なわれ，始政40周年記念台湾博覧会開会式実況は第１会場内儀式大会場より中継された（三局共）。10月19日（土曜日）午後８時00分から午後８時30分までは，「蕃山の夕べ（台中）　台中市水源地公園より中継（三局共）①〈栗祭のお話〉台中州理蕃課長・山口高七郎，②〈化蕃の杵歌〉化蕃二十名出演」[191]などが中継された。台湾博覧会会場よりの中継は，博覧会第２会場演芸館にマイクを設備して舞台中継を行なったが，そのうち，演芸は10月18日午後１時から午後３時まで，「〈蓬莱踊〉台北検番芸妓連中」[192]，11月４日午後３時から午後４時30分まで，「〈西川会舞踊〉西川会会員」[193]の２種目が中継された。

台湾音楽

台湾音楽は，「本島に台湾博覧会の開催せらるるや，上海或は福州等よりジヤズ団，京班等相当著名な劇団の来台を見るに至つた」[194]ので，そのうち，放送価値が豊富なものを選

191）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』478-479ページ。
192）　前掲191）に同じ。
193）　前掲191）に同じ。
194）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』479ページ。

び，台北放送局から放送し，台湾全島の本島人聴取者の慰安とあわせて日本内地人聴取者に京劇の概要をきく機会を提供した。

慰安

慰安は1935年８月22日，慰安種目のうちに「台湾博覧会関係の歌を編入し，台湾全島に放送発表し，又演芸館に出演の吉本興業部の出演者を台北放送局演奏室から音曲として」[195]放送した。また，10月12日茶業宣伝協会においてはお茶の日を開催し，当夜お茶の夕べを催し，全国新聞記者大会に列席の渡辺よしたか氏に「台湾の山々の歌」の短歌朗詠を放送するなど（表3-12），慰安的内容の放送は少なくなかった。

表3-12 慰安種目の放送内容

放送月日	放送時間	放送内容	中継放送局
８月22日（木曜）	20:50～21:20	歌謡曲「躍進台湾」，「台湾よいとこ」	台中，台南中継
11月22日（金曜）	21:00～21:20	音曲「梨園の裏」	台中，台南中継
10月12日（土曜）	18:30～19:30	お茶の夕べ「趣味講演　お茶の話」，茶摘歌「内地茶摘歌」，「福建茶摘歌」，「広東茶摘歌」	台中，台南中継
10月16日（水曜）	20:31～20:50	短歌朗詠「台湾の山々の歌」	台中，台南中継

（出所）『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』480ページにより作成。

場内放送

台湾博覧会事務局宣伝係では，「毎日午前前日のニユースを収集し，之に当日の注意事項或は諸行事等を加へて場内放送ニユースを編輯」[196]し，第１会場は儀式大会場屋上，陸橋北門コロンビア宣伝塔内演奏所の２カ所，第２会場は第１文化施設館階上，栄町門通ビクター宣伝塔内演奏所，子供の国コロンビア演奏所の３カ所のラウドスピーカーで放送した。また，時には号外を発行して台湾博覧会各会場内の各種の出来事を刻々と報道し，その間にはコロンピアレコード会社が提供した各種のレコード演奏を行なった。

以上の放送番組編成の内容から台北・台南・台中の３放送局が全機能を挙げて積極的に台湾博覧会の紹介宣伝に努めたことがわかる。

3-7 映画宣伝

映画宣伝の内容は，台湾博覧会の偉観を全島民に紹介宣伝するため，台湾教育会に委嘱し

195） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』480ページ。
196） 前掲195）に同じ。

表 3-13　映画フィルムのタイトルと場面

	映画フィルムのタイトル場面
第１巻タイトル１	駅頭歓迎門
第１巻タイトル２	秋の観光は博覧会へ，文字塔（タイトル），第一会場，受付，入口
第１巻タイトル３	開会の辞
第１巻タイトル４	中瀬事務総長事務経過報告
第１巻タイトル５	平塚会長式辞
第１巻タイトル６	中川総裁告辞，園遊会，満洲館，交通特設館（鉄道館），交通土木館，交通特設館（逓信館），林業館，産業館（内部），コロムビア広告塔
第１巻タイトル７	陸橋，開会式伝書鳩飛翔，第一府県館，第一府県館内部，朝鮮館，日本製鉄館，絵葉書売店，三井館，興業館，鉱山館，糖業館，街頭風景
第２巻タイトル７	第一会場，入口，第一文化施設館，愛知名古屋館，北海道館
第２巻タイトル１	藩屋，東京館，国防館，京都館，第二文化施設館，船舶館，電気館，奈良館，演芸館，演芸館内部（蓬莱踊），専売館（内部），海女実演館（内部），子供の国，太平町通，分場，分場全景，分場演芸館内部（支那劇），草山全景，草山雑景，草山分館，草山観光館（内部）
第２巻タイトル２	夜になれば，駅頭歓迎門夜景，市街夜景
第２巻タイトル３	誘ひ合せて博覧会へ
第２巻タイトル４	終り

（出所）『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』480-481ページより作成。

て第１，第２両会場，分場，草山分館ならびに開会式の盛観と盛装した台北市街の実況を撮影し，1935年10月14日「三六ミリ映画フィルム全長千七百七十三呎を二巻に編輯」[197]して，台湾西部５州の主要都市街に映画宣伝班を派遣した。その映画フィルムのタイトルと場面は，次の表 3-13 の通りである。

映画宣伝隊は３班に分け，第１班は台北州管内，第２班は新竹，台中州管内，第３班は台南，高雄州管内へそれぞれ派遣し，管内の各市，街および荘で映画宣伝をなし，台湾全島民が博覧会に参観する意欲を喚起しようとしたのだった。

3-8　航 空 宣 伝

航空宣伝は台湾国防義会航空部に委嘱し，台湾博覧会会期前２回にわたって台湾全島で行なわれた。1935年６月17日，第１回宣伝飛行の目的は，「始政四十周年記念台湾博覧会ノ依頼ニ依リ始政四十周年記念日ヲ期シ同会ノ宣伝ヲ目的トシ台北―屏東間主要都市ニ宣伝ビラ

197）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』481ページ。

ノ撒布並ニメッセージ投下を行フモノナリ」[198]，使用飛行機は義勇学校号（１機），操縦士塚原勇造，機関士時松地藏，宣伝ビラ撒布地および撒布枚数は「台北市七万枚，新竹市二万枚，台中市四万枚，鹿港街二万枚，斗六街一万枚，台南市四万枚，屏東市三万枚，桃園街一万枚，竹南街一万枚，彰化市二万枚，西螺街一万枚，嘉義市三万枚，高雄市四万枚」[199]，総計35万枚のビラを撒布し，台北市を除く「州所在都市には知事及市尹宛，台北及基隆を除く他の都市には市尹宛の，本会会長名メッセージを投下したのであったが，チラシ中には若干枚の事務局印を押捺したものを混入し，之を拾得した者には本会入場券一づつを，又メッセージを拾得し名宛に届出た者には同十枚づつを景品」[200]として，台湾博覧会の前人気を煽り，台湾全島民の関心をかきたてた。

1935年10月10日，第２回宣伝飛行は台湾博覧会開会式当日に挙行された。使用機および乗務員スタッフは，第１回同様であった。その目的は「始政四十周年記念台湾博覧会ノ依頼ニ依リ同博覧会ノ宣伝ヲ目的トシテ台北―屏東間主要都市ニ宣伝ビラノ撒布並ニメッセージ投下を行フモノナリ」[201]，宣伝ビラ撒布地および撒布枚数は「台北市四万枚，新竹市二万枚，豊原街五千枚，彰化市一万五千枚，鹿港街五千枚，斗六街五千枚，嘉義市二万五千枚，桃園街五千枚，竹南街五千枚，台中市二万五千枚，苗栗街五千枚，西螺街五千枚，員林街五千枚，台南市二万五千枚，高雄市二万五千枚，屏東市一万五千枚」[202]，総計23万枚，前回と同じく縦貫線を順次南下，宣伝ビラならびにメッセージを投下して台湾博覧会開会式の盛観を台湾島民に広く周知させた。

台湾国防義会航空部が各方面の依頼により，台湾博覧会会期中に行なった各種宣伝飛行は，①1935年11月11日「台北州警務部が博覧会入場券を混入せる衛生思想宣伝ビラを台北市内に撒布」[203]，②10月12日「軍司令部が会期中の人出を利用し，国防思想普及に関するビラを撒布」[204]，③10月17日「台湾日日新報社主催台日デー宣伝の為，ビラ十万枚を三機に分割して撒布」[205]，④10月23日「軍司令部が靖国神社大祭日に当り，国防思想普及に関する宣伝ビラを撒布」[206]，⑤11月３日「全島在郷軍人大会に際し，国防強化に関するビラ撒布，又此の外同大会を盛大ならしむる為，特に屏東飛行第八聯隊より軽爆三機飛来」[207]，

198） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』483ページ。
199） 前掲198）に同じ。
200） 前掲198）に同じ。
201） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』484ページ。
202） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』436ページ，484ページ。
203） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』485ページ。
204） 前掲203）に同じ。
205） 前掲203）に同じ。
206） 前掲203）に同じ。

⑥11月23日「軍司令部及西門町青年団が，国防思想の普及並に納税宣伝に関するビラを三機にて撒布」[208]などがあり，依頼者自身の目的を充分に達成しただけでなく，台湾博覧会の景気を盛りあげるにでも顕著な効果があり，「国防思想」の普及強化という目的のためにも活用された。

3-9　その他の宣伝

スタンプ宣伝

1935年３月20日，台湾博覧会は博覧会開催を記念するとともにこれを宣伝するため，スタンプ図案を懸賞募集し，ゴム印流れ込みで各300本ずつ計900本のスタンプを作製し，台湾島内諸官公署，銀行，会社，工場，旅館，団体，倶楽部および売店に無料配布してその使用を普及させた。草山分館においては，特に来観者の記念として別にスタンプを作製の上，自由に押捺させた。

記念スタンプと同時に，宣伝標語も懸賞募集した。当選標語は「一等〈躍進台湾　記念博〉，二等〈伸び行く台湾　輝く博覧会〉，三等〈来れ台湾　見よ博覧会〉，選外佳作〈宝島見るに折よき博覧会〉，〈蓬莱の島に輝く台湾博〉，〈秋の観光　台博へ〉，〈高砂や治まる御代の記念博〉，〈仰げ新高　観よ台湾博〉，〈御国の光四十年　輝く文化の博覧会〉，〈誘ひ合せて台湾博へ〉」[209]，その当選標語は「美麗なる淡色五種の台紙三千枚に印刷」[210]し，これを諸官公署，銀行，会社，工場，旅館，団体，倶楽部および商店などに送付して，その普及を図ると共に利用を慫慂し，特に事務局作製の各種封筒，諸印刷物などには必ずこれを表記して台湾博覧会の宣伝をはかった。

台湾博覧会の宣伝および前景気付けのために目論まれた懸賞付前売入場券売出は，1935年９月１日，台湾全島に200,000枚を販売し，販売価格は20銭（大人券），賞金総額は4,000円，そのうち，特等は500円（内地，朝鮮，満洲旅行券）２本，１等は10円（割増付き勧業債券）100本，２等は５円（商品券）300本，３等は演芸館優待券600本。抽選期日は1935年10月25日，第２会場内音楽堂，当選発表は1935年10月28日付け台湾島内日刊紙朝刊紙で行なわれた。

前売入場券は懸賞付きだったので，９月１日販売以前から台湾島民の関心を集め，販売当日「越智商店の一万二千枚を筆頭に，大口註文殺到し」[211]た。台湾博覧会では便宜上同会事

207）前掲203）に同じ。
208）前掲203）に同じ。
209）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』487ページ。
210）前掲209）に同じ。
211）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』488ページ。

務所のほかに，「菊元百貨店及太平町菊元商行の二箇所にも販売方を委託し」[212]た。台湾博覧会協賛会では前売入場券を「〈宣伝の夕〉参加者全部に一枚づつ贈呈，〈浴衣サービス〉参加五大カフエーに補助，〈雪洞広告〉註文一基毎に一枚贈呈」[213]した。

宣伝用小型燐寸

宣伝用小型燐寸は，台湾博覧会協賛会宣伝部で総数50万個を作製し，20万個は直接全国119カ所の商工会議所に寄贈したほか，台湾博覧会協賛会宣伝部からも宣伝依頼状とともに適当に配布し，「内地，朝鮮は勿論関東州，満洲国にも普及せしめた」[214]。30万個のうち10万個は直接台湾専売局自身が利用し，10万個は国際通運株式会社台北支店に依頼して，「台北市を除く島内八市の勧業課および澎湖，台東，花蓮港各街の庶務課宛送付」[215]し，残りの10万個は台湾博覧会協賛会事務所が，直接，「澎湖，台東，花蓮港各街の庶務課，台北市内，北投，草山の各カフエー，喫茶店，料理屋，飲食店，旅館，ダンスホール，ホテル，其の他」[216]に贈った。なお，開会後迎賓館および無料休憩所などにも適時配布して，台湾博覧会終了まで一般大衆に利用された。

宣伝浴衣

台湾博覧会協賛会宣伝部では「台湾博覧会開催を紹介宣伝し，以つて台湾本島民に周知せしむべく，博覧会宣伝浴衣を台湾全島の旅館，料理屋及カフエーより，二千八百四十反の前註文を受けて調製」[217]し，８月１日一斉に注文先へ発送した。その浴衣の宣伝標語は「〈躍進台湾記念博〉及〈秋は台湾博覧会へ〉と，白地に青く染出された浴衣は間もなく街頭の一点景と為り」[218]，台湾人の間に普及した。

台湾博覧会協賛会宣伝部では，この浴衣宣伝をさらに活用し，９月14日より３日間，台北市内の一流カフェーで，「浴衣サービス」の夕べを開催した。その様子は次の通りである。

「参加カフエーは美人座，日活，永楽，ボタン，羽衣の五軒，先づ夫々選抜きの美人十五人づつを宣伝隊に当て，総勢八十人近くの麗人群は粋な宣伝浴衣に脂粉の香を漂はし

212） 前掲211）に同じ。
213） 前掲211）に同じ。
214） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』489ページ。
215） 前掲214）に同じ。
216） 前掲214）に同じ。
217） 前掲214）に同じ。
218） 前掲214）に同じ。

て，十四日午後七時協賛会事務所前より二十余台の自動車に分乗，折柄小雨そぼ降る夜の街に，ヘッドライトの光茫を流し，本会宣伝歌に送られて出発，先頭に立つ細田管弦楽団の奏する進行曲の伴奏で，本町―都通―京町―太平町（折返して）―鉄道部前より三線道路―日活―永楽―羽衣より万華を一周―楽町―本町」[219]を通過した。

３日間にわたる台北市内での宣伝浴衣車のデモンストレーションは，至るところで人々の好奇心と注目を引き，宣伝効果があがったので，９月28日当日，基隆，新竹，台中，彰化，嘉義，台南，高雄，屏東，花蓮港，台東および馬公などの地を，揃って宣伝浴衣行進をし，台湾全島民を博覧会気分の中に巻きこんでいった。

４．会期中の各種特催日，実演と余興

4-1　各種特催日

台湾博覧会会期中開催された特催日は，国防デー，茶業デー，台日デー，馬匹デー，満洲国デー，カメラデー，台中農産品廉売デー，愛知名古屋デー，北海道デー，奈良デー，北海道館謝恩デー，京都デー，割引デーなどだった。

国防デーは，1935年10月12日，23日，11月３日，23日の４日間，台湾国防義会主催で，国防知識の普及を目的として，４回にわたって「① 南方第一線に在る台湾は島民自ら之を守るの精神，② 老若男女官民一致して台湾の国防を強化す，③ 航空事業の助長発展と防空」[220]などの国防知識の普及を期し，実施した。デーの概況は，「① 専売，学生の両義勇号を飛ばせ，〈我等の国体，我等の誇り，我等の国防，我等の務め〉と記した国防義会連合本部標語ビラを空中より撒布，② 国防館来観者全部に国防絵葉書を贈呈，③ 映画館では軍司令部提供の〈朔北の皇軍〉〈守れ台湾〉其の他を昼夜上映，④ サルムソン一及義勇号二，の三機が会場上空を乱舞し，国防ビラ一万五千枚を撒布，⑤〈守れ台湾の鎖鑰〉のスローガンの宣伝ビラ数千枚を入場者に漏なく頒布，⑥ 愛国婦人会員街頭へ総出動して〈国防マーク〉〈国防マツチ〉を販売」[221]するなどであった。

茶業デーは，1935年10月12日，25日，11月３日の３日間，台湾茶業宣伝協会主催で，博覧会を機に台湾茶の宣伝に努め，３回にわたって盛大な宣伝行事を実施した。その概況は「① 第一会場及分場入口にて，入場券優先者に赤色に〈茶〉と白く抜いた三角小旗二万本と，第二会場の台湾茶宣伝協会経営喫茶店優待券五百枚を配布，② 喫茶店では来店の幼児達に，

219）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』659ページ。
220）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』705ページ。
221）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』706ページ。

小旗と宣伝協会特製のゴム風船を贈呈，③〈お茶の日〉のアドバルーンを掲揚，④午後六時半より七時半迄〈茶業宣伝の夕〉と銘し，JFAK から〈講演：お茶の話。演奏：台湾チヤツカリ節。茶摘歌：内地茶摘歌，福建茶摘歌，広東茶摘歌〉のプログラムに依つて放送，⑤内外地よりの大会参加者には烏龍茶及包種茶の美装箱詰に絵葉書を添附して贈呈した」[222]などであった。

台日デーは，1935年10月17日，11月23日の２日間，台湾日日新報社が台湾博覧会の趣旨に協賛して，２回にわたって各種の催物を主催した。その概況は「① 午前八時爆音勇ましくサルムソン二，専売，学生の両義勇号二，計四機が十数万枚の台日デーの宣伝ビラ（中には約二千枚の本会入場券引換券を混入）を台北全市の上空に撒布した，② 午前九時の開場より各会場の入場者にして，切取らない本会入場券（新しい入場券）持参者先著順五千人に，台日社特製便箋紙一冊づつを贈呈，③ 大好評を博したカンカラ勝ちやん，桃太郎，丹下左膳，本島人芸姐，内地人女給等の大人形が市内を漫歩し，会場内では時事号外を配布した」[223]などであった。

馬匹デーは，台湾全島乗馬大会を機会に，台湾畜産協会はこれと連絡して，「馬事思想の普及宣伝，馬匹利用の増進，馬匹の利用性に関する宣伝，本島は役畜として従来牛を使役しつつあるが馬は役者として絶対的優良なる所以を宣伝」[224]という目的をもって，1935年10月26日から27日までの２日間，印刷物配布，児童乗馬，講演，映画会などの宣伝行事行なった。

満洲国デーは，1935年10月27日，来台中の駐日満洲帝国大使謝介石氏の主催により，満洲館において「満洲館接待室に官民有力者を招待，盛大なる日満交歓会を開催」[225]し，満洲館一般観覧者には「満洲と日本，満洲帝国の概要，満洲旅行の栞，統計上的満洲帝国，満洲と満鉄の各種印刷物，満洲国旗記念章（三万個）」[226]を無料配布し，「第二会場映画館に於て満洲国政府秘藏の映画を公開」[227]した。

カメラデーは，1935年11月３日，第１会場と第２会場において全関西写真連盟台湾支部主催，台湾博覧会協賛会および台北写真材料商組合後援で，「① 課題〈モデルを配した秋の台博風景〉，② 写真機を携帯してゐるアマチユア・カメラマンにして午前十時半迄台湾日日新報社前受付へ申出で，参加会員章を受けたる者，③ 特に先着者五百人は台博無料入場券進

222） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』707ページ。
223） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』708-709ページ。
224） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』709ページ。
225） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』710ページ。
226） 前掲225）に同じ。
227） 前掲225）に同じ。

呈，④参加会員章を佩びた者に限り会場内の自由撮影を許可，⑤モデルは応援出場の女給，舞妓等内台美人五十人，⑥第一会場では午前十時半より正午まで，第二会場では午後一時より三時まで」[228]の要項によりアマチュア・カメラマンを総動員して行なわれ，優秀な作品に対しては審査の上，等級別に賞杯が贈られたが，その見物人で場内は大混雑を極めた。

台中農産品廉売デーは，1935年10月31日，11月10日および17日の３回にわたって第２会場台中紹介所では商品廉売デーを催し，特産品「レモン，文旦，斗柚，乾筍」[229]などを時価の半額で売り出して人気を呼んだ。

愛知名古屋デーは，1935年11月12，13，14の３日間，「①買上げ金額に応じ記念品を進呈，②同館内特売店でも同様特別サービスを実施」[230]して催したが，当時同県総務部長，商工主事その他20数人の出品者，視察者などが渡台した上，台湾官民有力者，台湾博覧会関係者70余人を，鉄道ホテルに招待して披露の宴を張り，愛知県の生産品ならびに出品物の宣伝に努め，３日間のデー挙行期間には「パンフレツト，マツチ，絵葉書，手旗，玩具」[231]などを入場者一般に配付し，特に「チンドン屋一隊を傭ひ，会場内は勿論市中の枢要街路」[232]を宣伝に回らせた。

愛知名古屋デーの挙行と共に記念スタンプを押印したが，其の状況は「記念スタンプは愛知名古屋館並に愛知県略図を図案化したもので，其のスタンプは各二個づつ調製，来館者に随意捺印せしめた」[233]が，評判がよく押印者陸が続々と詰めかけた。愛知名古屋館の販売成績は，開館以来，「晴雨に拘らず観覧者殺到し，閉会に至る迄日夜多数に入場者があつた」[234]ので，即売，売約共非常な好成績を収め，開会後20日以内に即売品は皆無となり，追加出品するほどに売れ行きがよく，閉会に至るまでには，非売品は除いて各種の出品物はほとんど売り切れた。

北海道デーは，1935年11月16日からの３日間，「①館内陳列品の買上者には買上金額の如何に拘らず土産品を贈呈，②デー中に限り夜間も館内の即売店を開店」[235]などの特産物の紹介宣伝を開催し，買上者全部に長切昆布，鱈剥身を無償配布して特産品の宣伝に努め，第２会場内映画館では北海道観光映画を公開して景勝地を紹介し，入場者には北海道産ミルクの小缶を贈呈した。

228）前掲225）に同じ。
229）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』711ページ。
230）前掲229）に同じ。
231）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』393ページ。
232）前掲231）に同じ。
233）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』394ページ。
234）前掲231）に同じ。
235）前掲229）に同じ。

更に11月23，24日の２日間謝恩デーを開催し，一般顧客に報いるため，即売品の全部を１割引とし，買上者には帆立貝柱袋入を贈呈した。また，北海道館奉仕デーは11月26日より閉会日まで３日間開催し，感謝デーに引き続き即売品を１割引で販売し，特産品の宣伝紹介に努め売切品が続出した。

北海道館では，館の一部にミルクホールを設け，経営には大日本製乳協会台北支部が当たり，一般来観者に試飲させ紹介した。そのミルクは，「森永，明治，極東辰馬等各社のものを日々交互に売り，一杯五銭で一日平均十円余の収入を得，総売上は五百円に」[236]のぼった。なお，道庁は試飲券2,000枚を買い上げ，台北市内の有力者，台湾博覧会関係者に配付して宣伝に努めた。また，北海道宣伝のため，希望者に配布した印刷物は「北海道概況三百部，最近の北海道千五百部，北海道及樺太年鑑百部，北海道の産業と景勝地二千部，北海道の商品千部，北海道絵葉書二千部」[237]などであった。

北海道館を宣伝紹介するために，北海道デー，北海道謝恩デー，北海道館奉仕デーを催し，あるいは印刷物を配布し，あるいは北海道産品の販路開拓のために取り引きの斡旋および懇談会などを開催し，さらに北海道物産に対する認識を深めることができ，開会以来，好評を博した。

奈良デーは，1935年11月16，17日の２日間，奈良県物産を宣伝紹介するため特売を行なった。

京都デーは，1935年11月23，24日の２日間，即売品は「西陣織物，京焼，京人形，京染，刺繍，半襟，金属品，漆器，仏壇，仏具，神祭用具，扇子，団扇」[238]などで，デー中の入場者千人に限り買上高一円ごとに一枚の即時引換福引券を贈った。引換景品は「① 一等は一本，二枚折金屏風，② 二等は一本，東雲染友仙著尺，③ 三等は三本，鋼器煙草セット，④ 四等は十本，陶器煎茶器，⑤ 五等は二十本，富士絹風風呂敷，⑥ 六等は九百六十五本キツラメル」[239]などだった。

京都館では，出品陳列以外に蒼竜楼に茶席を設けて京都の名勝画８面を掲げ，名勝の宣伝をし，一般観覧者に茶菓を接待し，京都デーの開催で福引景品付きの売り出しを行ない，人気を集めた。

割引デーは，1935年11月24日，愛知名古屋館を先駆として，25日より第１会場の「① 産業館の澎湖庁，台北州，② 第一府県館の長崎県，大分県，都城市，③ 第二府県館の三重，山口，熊本，埼玉の諸県及高山市」[240]，第２会場の「愛知名古屋館，北海道館，京都館，第

236） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』396ページ。
237） 前掲236）に同じ。
238） 前掲229）に同じ。
239） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』711-712ページ。

二文化施設館」[241]，および分場の「南方館，福建省特産物紹介所」[242]などの各館が一斉に１割から５割引デーを行ない，更に27日から第１府県館では那覇市，第２府県館では富山，岩手，石川の諸県および樺太庁，産業館では高雄，台南，台中の各州も参加し，活発な内台商戦を展開し，来観者の財布のひもをゆるめさせ，博覧会の掉尾を賑わした。

4-2　実演および余興

以上の各種デーは集客力があったが，以下の各種の実演も広く人々の関心を集めた。

大阪館は，出品陳列以外に「懸賞字探し」[243]を行なって入館者を誘致し，「台湾と最も密接なる大阪」[244]と題する冊子および２枚１組の大阪館絵葉書をそれぞれ１万部および大阪商品宣伝のセロハン広告紙などを調製し，冊子および絵葉書は開会式当日来賓に贈呈し，さらに台湾全島関係先にも配布し，セロハン広告紙は大阪館内陳列棚および台北市内の栄えた町の店頭に貼りつけて宣伝に努めた。

交通土木館は，単に機械のみの出陳では無味乾燥であるというので「〈鉄道乗車券実演〉，〈抽籤券差上げます〉」[245]と記し，自動インキ送り乗車券両面印刷機の持つ独特の機能を紹介すると共に，実演によって調製する模擬乗車券の一面には，「鉄道公徳標語其の他の宣伝事項を印刷，他の一面には民間の広告文を刷込み，之を懸賞附の宣伝券として」[246]観覧者に配布し，その数は90万枚に達した。また，専売館は包装用器具機械類の機能を紹介するため，「壜詰機の打栓機，レツテル貼附機，コンプレツサー，コンベヤー，電動装置等の実物を設備し，男工六人，女工五人，監督者一人を附して壜詰より箱詰に至るまでの工程を実演した」[247]が，実演は毎日午前10時より午後９時まで14回繰り返した。

電気館では，陳列した雷神ロボットは「雲に擬せる台上に，太鼓を鳴らしつつ，空中を走っている様な身長八尺の雷神を据ゑ観衆が之に対して質問を発すれば，雷神は之に応じて応答する仕掛と為し，其の眼には電球を，背後の稲妻にはネオン管を取附け，何れも点滅装置に依り明滅せしめて，恐ろしげな雷神の風貌を」[248]遺憾なく表現した。美人ロボットも「ロボットと握手すればイエース又はノーのサインを為す装置である。右のサインは首を縦又は

240）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』712ページ。
241）前掲240）に同じ。
242）前掲240）に同じ。
243）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』397ページ。
244）前掲243）に同じ。
245）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』307ページ。
246）前掲245）に同じ。
247）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』411ページ。
248）前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』401ページ。

横に振ることに因り表示するものにて，ロボットの右手にスイッチがあり」[249]，観覧者の把握によって歯車が噛み合い，応答する装置で，人気を呼んだ。

また，特別展示した「電気ホームの一日」の６景は，「① 午前六時朝の御炊事（中流家庭の炊事場にて女中が，電熱器を使用して朝の炊事を為して居る状態を示し，窓外には夫妻並に子供が，太陽を浴びてラジオ体操を為し居る状態を見せ，炊事場の電化は生活改善上缺くべからざることを暗示した），② 午前八時朝の御化粧（中流家庭の主婦の居間を見せ，其の中央に若主婦の化粧中のポーズを人形にて表示し，座右には電気利用の調度品即ち照明鏡，電気ヘヤーアイロン，ヘヤードライヤー，電気座布団，電気時計等の実物を展示した），③ 午前十時御裁縫の時間（中流家庭の座敷にて，母親と娘が共に裁縫に余念ない有様を表現し，娘は裁縫ミシンに向ひ，其の側に母親が坐して電気アイロンを使用している様を示した），④ 午後二時楽しい御来客（中流家庭の客室に於て，婦人主客が卓を囲んで話に花を咲かせ，其の側にて子供が無心に玩具を弄び，書院窓の向側より女中が御茶を運び来る景色を示し，此の室に相応しき調度品として，電扇，シガーライター，ラジオスタンド，電気壁掛時計，コーヒーポット等を展示した），⑤ 午後四時夕方の御掃除（極モダーンな洋風応接間に，若き婦人が真空掃除機を以て掃除し居る様を示し，之に大型電気スタンド，壁掛時計，ラジオセット，電気ストーブを配した），⑥ 午後七時今日の復習（女学生が自室の机に凭れて勉強し居る状態を示し，室内装飾等趣味に適合する様に扱ひ，之に配するに方今種々論議され居る，所謂眼の護りたる明視スタンド其の他ベルトフアン（リボン電扇）及電気時計を以てした）」[250]など，１つの家庭が１日の中で使用する電器商品を紹介した。

海女実演館は，海女が大型水槽の中で真珠をとる実演を行ない，多くの台湾島民の好奇心を引き寄せ，実演時間はいつも満員であった。

子供の国は，第２会場南側帯児玉将軍寿像を中心とした約3,000坪の地域を５区に分かち，子供本位の智育，体育，遊戯娯楽などに関する各種各様の設備を置き，会期中，昼夜無料公開した。

分場演芸館は，台湾本島人大衆に人気のある中国の名優小三麻子を上海から招聘した。その興行物は余興中の圧巻で，開館と共に絶大なる人気を博し，全会期を通じて盛況であった。

観光事業は台湾博覧会協賛会余興部の経営事業で，演芸館，映画館，音楽堂，子供の国などの設備を使用して，請負または直営により各種演芸の興行，催物などが行なわれた。主な催物は，博覧会宣伝の夕，浴衣サービス，伝書鳩放鳩，宝探し，高砂族舞踊，花火大会，山

249） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』403ページ。
250） 前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』402ページ。

岳横断伝書鳩競翔大会，高砂族舞踊，划龍船，博多ドンタク，武者行列，媽祖行列，児童デー，飾窓装飾競技大会，変装さがし，台博祭などであった。

台湾博覧会会場内自由興行物は，第２会場では海女実演館，水族館，分場ではオートバイ曲芸乗り，奇物園，迷路など５件に止まった。各種大会は，台湾博覧会会期中を利用し，台湾島内は勿論，全国的に各種団体がその会場を台北に選び，教育，学芸，宗教，産業その他の団体が大会を開催した。

おわりに

すでに述べたように，この博覧会挙行の主たる目的は，日本が1895年に台湾統治を開始して以降，ただちに台湾経営政策に着手し，40年の努力を経て清朝の李鴻章をして「瘴烟蠻雨の地，其の民治し難く，加ふるに生蕃と云ふ獰猛なる化外の民の蟠踞するあり……」[251]と嘆かしめた台湾を外部世界が刮目して見るべき楽土として成功裡に建設しえたことを対外的に誇示することにあったことは言うまでもない。

台湾博覧会の宣伝活動は，出品勧誘とともに重視され，台湾博覧会総務部に宣伝係が置かれ，協賛会宣伝部と密接な連絡を執り，協力して博覧会の趣旨，目的を徹底させていった。

宣伝地域は，① 台湾島内，② 日本内地，③ 樺太・満州・朝鮮・南支および南洋，の３範囲に大別され，各地域に応じた宣伝が行なわれた。台湾島内では，本島人知識階級には台湾博覧会開設の趣旨，目的が理解されたが，一般大衆には国語普及の状態を考慮し，その徹底には苦心したとされる。日本内地，樺太，満鮮，南支および南洋については，観客誘致が主眼とされた。南支に対しては，別に中国語による文書宣伝が行なわれ，南洋に対しては英文も併用された。

打上花火は，台湾博覧会開会式，閉会式および会期中，毎日開場および閉場時刻には百発を打上げ，時刻を一般に報せると共に，博覧会の雰囲気を盛り上げた。

その他の宣伝は，記念スタンプ，宣伝標語，懸賞付き前売入場券売り出し，内地各博覧会における宣伝，宣伝用小型マッチ，宣伝浴衣，会場案内配布および絵葉書販売などであった。

1935年11月３日から11月15日まで，台湾博覧会は「総督府各部局，台北帝国大学その他諸学校，中央研究所，糖業試験所ならびに各種試験所などの官衙」に委託し，30万点以上の出品物について「出品物鑑査」を進め，鑑査は出品物の経済的，実用的価値，学理の応用点，重要物産としての位置，出品人の業況，功績などを参酌し実物に即して鑑査が行なわれた。

台湾博覧会会期50日間の入場者数は，275万8,895人に達した。そのうち第１会場は89万

251）　前掲『始政四十年周年記念台湾博覧会誌』１ページ。

6,646人，第２会場は120万484人（うち昼間は90万1,388人，夜間は29万9,096人），分場は53万9,691人，草山分館は12万2,074人で，当時の台湾本島520万の総人口から言えば，驚くべき数字であった。

台湾博覧会は，1935年10月10日から1935年11月28日の閉会式まで，台湾総督府があらゆる業界団体および台湾島民を動員した一大イベントであった。博覧会会期中は，宣伝活動，各館の出品内容，余興などのすべてにおいて台湾島民に刺激を与え，日本人の衣食住と文化および産業などについて台湾人に新たな認識を与えるものとなった。

台湾総督府は，40年間における躍進台湾の実情を一般に周知させるとともに，日本の産業の実勢を台湾島民に認識させたことによって，台湾博覧会開催の成果を得られたと言えよう。

1935年始政40周年記念台湾展覧会開催ののちは，太平洋戦争の戦況悪化とそれに続く戦のため，日本は台湾を放棄し，始政50周年は行なわれなかったので，これが台湾展覧会の最後となった。